BROADCASTING CREATORS' ASSOCIATION OF JAPAN

放送人の会

No. 52
2011・9・9

〒102-0094 千代田区紀尾井町1－1 千代田放送会館 3階
℡&fax 03-3221-0019 Mail info@hosojin.com 代表幹事 今野 勉
編集担当 伊藤雅浩（会報編集長）、鈴木典之、前川英樹（HP担当）、松尾羊一 事務局 佐藤真美子

この震災で起こった初めてのこと

代表幹事 今野 勉

東日本大震災のあとでは、物の見方が変わった、変えざるをえなくなった、という言葉をよく聞く。

たとえば作家・辺見庸さんの言葉。

『3・11によって破壊され、毀損されたものは何だったのか。実は我々が生きる上で無意識にスタンダードとしてきた理（ことわり）、事理だったと思う。大津波にしろ原発事故にしろ、こんな風景はあり得ないと信じてきたこと。価値観。サルトルであればハイデッガーであればモラルの型にしてきた思想。それらがすべて無効に見えてきた。文学的表現を擦れば『内面の決壊』が起きた。相当に深刻なレベルで」

（「近現代問い直す指標に」朝日新聞8・31夕）

私も共感するところがある。こんどの被災地、北は田老から南は相馬まで（宮古、釜石、陸前高田、気仙沼、石巻、仙台、塩釜、松島など）は、学生時代に訪れたことがある土地だけになおさらである。

共感したうえで、では、こんどの震災の何が今までの価値観をすべて無効にするような「初体験感覚」を私にもたらしたのか、と自らに問うてみると、意外に判然としないのである。

「近現代」に限ってここ100年を顧みれば、88年前の関東大震災がある。死者、行方不明合わせて15万人を越えた。115年前の明治三陸沖地震の津波では2万人を越える死者があった。人口比を考えれば今回の津波より被害の程度が大きかったといえる。

それまでの価値観が破壊されたという点では、広島や長崎の原爆投下とそれに続く敗戦が、私にとって最大のものである。ヒロシマ、その年末までの死者14万人、ナガサキ7万人。

誤解のないように言っておくが、今回の震災の被害は過去の震災に比べれば小さいということを言おうとしているのではない。その逆である。

数量的レベルで言えば最大ではない今回の災害が、私たちの精神の内面を破壊するほどの深刻さを持っているのはなぜなのだろう、ということなのだ。

ふつうの人々の無垢な映像

今回の震災のテレビ報道は、じしんの被害状況を実況中継しようと飛び立ったヘリコプターに搭載されたテレビカメラが、襲来してきた津波を偶然とらえることに成功、放送史上前代未聞の、津波襲来生中継から始まった。

同じ頃、東北の太平洋岸の数十の村や町で、数百人の住民が小型ビデオカメラで襲来する津波の一部始終を撮影していた。そしてそれから何週間か、私たちはテレビでそれらの映像の氾濫に文字通り溺れんばかりになった。

遠くから迫る津波、みるみる脹れあがる圧倒的な力となり奔流となり車を建物を船をそして人を押し流し押しさらっていく様子が数百のビデオカメラで記録された。それらの映像は、商業的意図も報道的意図も美的意図も持たない、ただそこにいたから撮るしかなかったという無垢な映像であった。

私たちは、数百の被災現場、事故現場に立つ目撃者の立場に否応なく立つことになった。こうした体験は人類史上、はじめてのことではないだろうか。

そこで私たちの中に何が起こったか。

連日目にするそれらの無垢な映像は、私たちが初めて見る災害というものの実相であった。過去の価値観の崩壊は、この実相を見ることを契機として始まったとしか思えない。

「内面の決壊」はこうして起こったのではないかと、今、私は思っている。

3・11短信セッション BY 放送人

東日本大震災からほぼ6ヶ月経ちました。「戦後」から「災後」へ、揺らぐ意識のただ中で「放送人の会」の有志の皆さんに「今こんなことを考えている」と、さまざまな玉文を寄せて頂きました。以下、お名前の50音順に並べて構成いたしました

公正中立と人肌の暖かさ

大山勝美

「気仙沼は復旧が遅れてる。千年に一回の災害の現場はみた方がいい」。河野尚行さんの助言で7月末に腰をあげた。駅を下りると、海からの風にかすかに焦げた匂いが含まれている。地震・津波・火災の三重苦に襲われ、1万人の死者、7千人の行方不明者を生んだ。

長さ350m、東洋一の長さを誇る桟橋は100隻以上入港できるが、朝の漁港に着いたのは高知県のカツオ船2隻のみ。まわりの海産物加工工場は土地浸水もあって潰滅状態。すこし小高い瓦礫集積所では、20年分のゴミの山々に圧倒された。

案内役のタクシーの運転手秋本氏（51）も、親戚を失った。「地獄でした。暗い夜、頼りになったのはラジオ。テレビはすさまじくて恐かった」。たしかに被災地で暗い闇の中から暖かく語りかけるラジオの声に、不安や恐怖を癒された人は多いと聞いた。

テレビは各局、系列局を動員しての総力取材でより刺戟的で迫力のある映像を競った。ラジオは被災地の人びとに重宝がられ、テレビは被災地以外の地域に災害のしさまじさを伝えた。

福島の原発事故報道は、これまでの国や電力会社まかせにしてきたツケを味わった。官界、政界、業界、学者それにマスコミまでグルになった抱き合い体質で、政府や東京電力の発表通りの報道だった限界を露呈したのだ。

マスコミの「発表ジャーナリズム」は、横並び一線の高所に立った政・官・財の金太郎飴情報になる。本来は「検証や調査ジャーナリズム」こそが、情報の独自性を生む筈なのに。本当に市民が知りたい情報を、マスコミは伝えてないのではという疑問はひろがりつつある。

東大大学院教授の林美香著「〈オンナコドモ〉のジャーナリズム」（岩波新書）で、従来の新聞1面にあるような公正中立の政治や経済の報道を「オトコ」のジャーナリズムとし、現代では、社会的弱者や少数派の側に立つ「つながり」「連帯」「共生」をモットーとする「オンナコドモ」のジャーナリズムを提唱している。

JNN系の特番「記者たちの眼差し」（6月5日）は、取材記者たちの個人感情をむきだしの被災地リポートであった。パニックに陥りながらカメラを回し、瓦礫の中のランドセルに涙し、子供の遺体を発見した両親に嗚咽する。被災者に寄り添い、詫びながら取材する姿勢は、人肌の暖かさと優しさにみち、新鮮であった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

大震災　山形からの報告

大類　啓

本県の震度は5強・弱。県の最終まとめ（5月20日）によると主な被害は死者3、重軽傷者29。建物損壊80棟。停電53万戸（ほぼ全域。約30時間後に完全復旧）。他に燃料不足等があったが、道路、鉄道、港湾、空港はおおむね無傷。人的被害は高齢者のショック死、転倒が原因だった。被災3県に比べれば山形県の被害は極めて軽微だった。

メディア各局はどう動いたか。山形市から仙台市までは通常、車で50分。△震災初期Vは民放山形4局とも当日夜から各系列で、人・モノの緊急応援態勢に入り、全国中継等を支えた。中には、被災した仙台局社員に向け連日大量の食事を持ち込んだ山形局もあった。

△第2ステージVは独自取材。各局が山形県出身者、本県への避難者等の取材に傾斜し、ローカル枠で放送。これは現在も続く。

だが、5月連休ごろから様変わりしてくる。「支援」の2文字を楯に「歌って踊って夏祭り」が前面に出てきた。当初の「自粛」はかき消えた。世相がリードし、メディアが増幅する。祭りは古来、為政者が民衆の不満をそらすため陰に陽に関与して生まれた史実がある。被災者の心の闇に取材が届かない。

初期報道で見逃せないのはコミュニティラジオの活躍である。同ラジオ局の地域ネットワーク「東北コミュニティ放送協会」（事務局　山形市）には23局が加盟している。同協議会は組織あげて被災局の復旧、放送継続に取り組み、臨時局開設に奔走。さらに、全国のコミュニティ局に呼び掛けてラジオ3千台を確保し、被災者に提供したという。同協議会には7月末総務省から感謝状が贈られた。

△報道第3ステージVは原発だ。山形は原発ゼロ県である。だが、日本列島の台所を担う食料供給基地なのだ。葉物、魚介類（日本海産）、夏の果物等は無罪だったが、牛肉についてはエサの汚染わら問題が引っ掛かった。このため全国に先駆けて数千頭に及ぶ出荷前検査に踏み切った。最大のヤマ場はコメだ。コメも刈り取り前、出荷直前の2段階方式で全35市町村で検査することを決定。

もう一つ。原発関連で山形県内への避難者は8月11日現在、これまで最多の1万人を突破。このうち8割が福島からの脱出組だ。

吉村美恵子知事は7月12日の全国知事

会議で嘉田由紀子滋賀県知事と連名で「脱」「反」ならぬ新語の「卒」原発を提唱した。有名人を総動員し、なんでもかんでも「がんばろう」で締めくくるメディア。「安全」神話に加担したのもメディア。大震災はメディアの言葉力も問い掛けている。（8月21日・記）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

団栗の　指揮棒ころころ　乱群舞

荻野慶人

3・11東日本大震災は、現代日本の弱点をさらけ出した。原子力発電所事故を併発し、巨大津波の惨禍だけではすまなくなった。

世論は現政権の非力、東京電力の杜撰を指弾する。政権交代の悲願に応えた筈の民主党は、僅か二年で諸悪の元凶にイメージダウンした。TVで傍目八目の空論が展開するその刻一刻、被災地の高齢、障害、失職、無縁など…孤独な弱者は行き詰まってゆくのだ。

云々する僕も傍観だけの無力が口惜しい。脳内はドラマに似たディゾルヴで16年遡る。

1995・1・17の早暁5時46分であった。

突然の衝撃で目が醒めた。大阪に単身赴任中で月末に62歳になる僕は、西宮市・六甲山麓のマンションのベッドで数センチは浮き上がったかと思う。小箱や雑誌が乱れ飛び書棚転倒が明確に見えたのだから、目覚めるのも速かったが翻弄される時間も長かったのだ。

この直下型地震は震度7、M7・3の戦後最大規模で、阪神・淡路大震災と呼ばれる。

跳ね起きて革ジャンパーとマフラーを手にした時、玄関のブザーが鳴りドアが激しく叩かれた。隣家の新婚夫婦であった。「大丈夫ですか?」と懐中電灯を手に震える声で言う。「お手伝いすることがあれば、言って下さい」と真顔だ。息子たちと同年配の健やかな後ろ姿に、僕の心は和んだ。

半年ほど前からの顔見知りだが、隣人らしい会話は一度もない。スーパーマーケットへの道で出会うことはあっても、24～25歳かと見える今風に髪を染めたカップルは、昼間から手をつないだりしていて馴染めなかった。

二人は、激震の恐怖が一先ず遠退くと「隣の小父さん、大丈夫かな?」「声をかけて上げようか!」と囁いていたのか。彼らの眼に僕は、禿頭の侘しい独居老人だったのだ。

ノックに返事がなければ、彼はベランダの境界を乗り越えガラス戸を叩き割って駈け込んでくれたに違いない。隣近所のことなど頭を掠めもしなかった僕は、恥ずかしかった。

街は惨憺たる形相であった。昔風の木造二階建アパートは一階がペシャンコに圧し潰され、高層マンションも一階のピロティーが跪いて前のめりに倒壊し、就寝中の住民…中でも独り住まいは想像だけでも悲惨だ。僕たち新築三階建が堅牢は幸運だったに過ぎない。

中学校での放射線教育推進案や、子ども手当か児童手当か論議のニュースを見ながら、彼と彼女を懐かしく想う。愛児がどんな大人になりたいと言っているか、尋ねてみたい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

芸術の効用

織田晃之祐

ある学生が電話をかけてきた。「先生スゴイですね。先生の1980年のLPをネットで見たら、大津波と原発事故の曲が入っている。ビックリしました。これこそ〝芸術の効用〟ですね。3・11の津波と原発事故の予見を、30数年前に1枚のレコードに収めていたんですね。」

〝芸術の効用〟刺激的なフレーズである。その事が、いま、若い人から打ちかえされてきた。遠い記憶を回顧する。しかし、そのレコードは、すでに手元にはない。手懸りは10数年前、そのLPを復刻したCDである。書棚を探す。あった。「ミュージック　エフェクト」副題「NHKスペシャルのためのサウンド」のアルバムだ。

当時私は、NHKテレビの音響効果を担当していた。その頃の放送は、ほとんどが1回限り、再放送やアーカイブス枠などはなかったから、作られたサウンドは、その放送が終われば消えてゆく。まさに一回性の、儚い運命であった。その儚い音の命を「おださん、レコードで残すべきじゃないの」言ってくれた人がいた。そのお蔭で、30数年後の今、その音の博動のリズム、想念のメロディーが、この瞬間、蘇生する。

指摘の曲は「ボロロッカ、南米アマゾン河、大津波」と1979年アメリカ、スリーマイル原発事故のための「チャイナ　シンドローム」。たしかに大津波と原発事故が1枚のレコードに収まっている。

しかし不覚であった。実は、このレコードを作った当人当方がこの事を忘却していたのだ。「天災は忘れた頃にやってくる」寺田寅彦の言葉である。当方も又、その忘却の性を遺憾なく発揮し今に至っていたのだった。

「芸術の効用は、未来の状況を予見し、本来の人間性を提示することである」。このフレーズはある美大の授業で10数年言い続けてきたことであった。電話の学生の主旨は、むしろその授業を思い出してのことではなかったか…。「芸術の効用」…この際、忘却の代償として素直に考えてみる。1枚のレコード上で津波と原発が遭遇する。さらに素直になってみる。3・11の予見と捉えてみる。そして、その事を一人の若者が発信してくる…。これは嬉しい。少々の逸脱があるにせよこれは嬉しいことである。

大災害から早6ヶ月。日々続く放送表現…。そして、その過去の遺産が今回のように機能し忘れられる事なく人々を喚起し続けることを、不肖忘却の徒は心から願うばかりである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

大政翼賛会

各務　孝

3・11以後、何を伝え、語り、論じるに際しても、3・11が枕詞になっている昨今だが、10年前の9・11のアメリカでのナショナリズムの高揚のあまり、人種差別、宗教差別が助長されたような事態がわ

が国でも起こらなければ良いがといささか、危惧している。勿論、3・11と9・11を同一に論じるのはナンセンスだが、3・11以後の、頑張れ日本コールには、なでしこジャパンへの世を挙げての熱狂的な肩入れに象徴されるようなナショナリズム鼓吹の匂いが漂っている気がするのは思い過ごしなのだろうか。また、この何カ月間の官民一斉の菅たたきにメディアが果たした役割などに思いを致すとき、この国は少数意見が成り立ちにくい風土なのかと思えてくる。

日本復興のためには与野党あげての救国内閣しかないような最近の風潮に、戦前の近衛内閣の新体制運動という政界再編やそれに続いた大政翼賛会を連想してしまうのは、年寄りの杞憂に過ぎないことを切に、望んでいる。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

3・11 仙台にいました

加賀美 幸子

3・11、その日、実は 巨大地震のど真ん中にいました。

NHK仙台放送局制作、ハイビジョン番組「還ってくる雪」ナレーション収録のリハーサルを終え、本番前のコメント直しにかかっていた時、14・46 突然の大地震襲来、硬いテーブルの下にもぐりましたが、これで身を守ることなどできないと、死を覚悟しました。見たこと聞いたこともない凄まじい揺れでした。放送された映像どころではありません。

幸い落下物にもあたらず乗り越えましたが、どうしても、すぐ帰らなくてはならない仕事が控えておりましたため、交通、通信、電気、水、全てが断の中、やっと見つかった車で、信号も消え、断水のためトイレも使えない、ガソリンの給油もままならない不安な道を…更に、丁度、福島原発・1号機が爆発したその中を走り抜け、無理に無理を重ねて13日の明け方、奇跡的に戻ることができました。

次々、原発の爆発、異状事態、そして地獄のような津波に呑みこまれた多くの人々、残された人々の惨状、私たちに何ができるか、日本はこれからどうなるか、今後のことを重く考えます。

（平成23年3月15日 記） ＊「還ってくる雪」はその後、東北ブロックGTV、BSプレミアムで放送されました。

【追記】 3・11以来、胸が痛くない日はありません。リアルタイムで激震の場にいたものとして、そしてその場に残らず帰ってきたものとして、又、古典を読むことをライフワークとしているものとして、思いの複雑さは筆舌しがたいのです。

『方丈記』は伝えます。1185年の「元暦の大地震」について。「山崩れて 川を埋み 海かたぶきて、陸をひたせり 土さけて水湧きあがり…」全く同じです。

目の前で、飲まれ埋もれていった人びと…生きていればたとえどんなに辛くても、道は続きます。どこに掴まりどこに逃げたかで、生死が分かれた人びと…リアルタイムで見てきた私はその無念さが他人事でなく胸がかきむしられます。

国の対応、ボランティアの在り方等々…今、そして今後、何より大事で、問われますが、…生きて残ることができず、目の前であれよあれよという間に流され呑まれていった多くの人びとの無念さを思うと、いたたまれません。

更にその頃、私は、五木寛之さんの『親鸞』を60回にわたって放送するため、収録中でした。親鸞がいきた時代も重なります。戦乱と飢饉の時代。1181年、9歳で親鸞(幼名忠範)は、稚児として比叡山に入りますが、「…辻のあちこちに倒れた人の姿が見える。飢えと流行り病で、無数の人びとが死んでいくのだ。そんな町を、たとえ粗末な牛車であろうとも、車にのって通りすぎていくのは、体が震えるほどうしろめたい気持だった。」とあります。仕事のためとはいえ、戻ってきた私自身にもその後ろめたさは重なるのです。

短歌俳句の番組も長く担当してきましたが、実は関西の大地震のすぐ後、神戸にお住まいのホトトギスの主催者、稲畑汀子さん（高浜虚子のお孫さん）の句会を中継致しました。忘れられない句会でした。その時の稲畑さんの句「無事といふ ことを語るも 悴(かじか)みて」…以来、片時もこの句は離れません。今回も全く同じ心境です。…多くの方も同じではないでしょうか。

3・11以来、日本は変わり、変わらざるを得ません。一人ひとりが思うこと、一人ひとりができること…先はみえませんが、それぞれの立場、それぞれの体験の中で、どう進んでいくか、今後の道のりが問われます。

（そんな中、古典を読むことは後ろ向きどころか、多くの生き方のメッセージを手にできる実感があります。『万葉集』『源氏物語』『枕草子』『平家物語』『徒然草』『方丈記』…私はいつも、今を、先を見るために読み続け、微力ながら語り続けたいと思っています。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

チャリティライブイベント

「フクシマを思う」

鎌内啓子

3・11に起きた東日本大震災、福島原発大事故以来、心に重く圧し掛かっている思いを何か表現出来ないかと仕事仲間の友人に相談。意気投合したのがチャリティライブイベント「フクシマを思う」。（5月16日、武蔵野市吉祥寺にある光専寺本堂で実施）当日は、福島に6年間在住し、今も福島医大で音楽を教えている尺八奏者・ブルースヒューバナーさん（カリホルニア出身のアメリカ人）、彼はお世話になった第二の故郷・大好きな福島の方々に少しでも恩返しがしたいと被災地でチャリティライブをしている。鉄の創作楽器波紋音（はもん）奏者・永田砂知子さん、彼女は、福島の問題は、福島だけのものではなく、日本人全体、世界の問題として問われている。音というのは古代より場を清め、地を鎮めるために存在した。太古の昔のように、波紋音が少しでも場を鎮められることを願って演奏。俳優・金子あいさんは福島在住の詩人・和合亮一さんが震災後にTwitterで「詩の礫」を呟いているのを読み、その言葉が深く胸に突き刺さり、揺さぶられ、この詩をあなたのために読みたいと朗読。尺八、波紋音、詩の朗読、3人のアーティストの演奏は参加者150人の胸に

深く響いた。

演奏の後は参加者と共にフクシマへの思いを語り合いました。福島から駆けつけた方の切実な思い、状況がしっかり語られ、このイベントに多忙な中を縫って駆けつけて下さった作家の澤地久枝さんが「これからはフクシマと共に生きる覚悟をし、もう原発は要らないの行動をしましょう」と発言され、参加者全員その言葉を深く胸に刻み会場をあとにしました。

当日は、地元のコミュニティラジオ・むさしのFM収録（5月26日20・00～21・00放送）、武蔵野・三鷹ケーブルテレビ、NHK「ニュースウオッチ9」（6月16日放映）の取材もありました。義捐金11万円は福島災害対策本部に送りました。

「フクシマを思う」シリーズ第2回は7月26日「フクシマを奏でる」を実施、3回目は11月下旬を予定しています。フクシマの問題は文明を追い続け繁栄してきた私達の生き方が問われている課題だと思われるので、今後も息長く続けようと思っています。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「終わらない悪夢」

北村美恵

人間は、……いや、人間にかぎらないのかも知れませんが、トシをとると最も得意だったところから駄目になる、と言います。それはわたしに関する限り、紛うことのない真実であるようです。子供の頃のわたしは、目がよく見えました。検査をされると楽に1・5、時には2・0というのが普通で、1・2になったことはまずなかったと思います。また、見たもの聞いたことが、別段の努力をせずともすいすいと頭に入って、覚えることが出来ました。つまりわたしが得意としたのは、視力と記憶力であったのです。

そこで、その当然の結果として、80歳近くになったわたしの身体でいま、最もひどいダメージを受けているのがそれ、視力と記憶力です。

視力の方は、眼鏡という有難い器具のおかげで何とか補いがついているようではありますが、その「進化」の程度が半端じゃなくて、2年で合わなくなります。特に辞書を引いたりする時の小さな文字が厄介で、それが無残に破壊された情けない記憶力と相まって、かつてあれほど楽しかった読書と調べ物が、耐えがたい苦痛に変わってしまいました。

わたしがこの欄にテレビ受像機とDVDプレイヤーを地デジ・BS対応に切り替えたという話を書いたのは、もう5年ほども前のことですから、今年7月のアナログ廃止は何の関係もありませんでしたが、この夏、プレイヤーはBD（ブルーレイ・ディスク）対応の新しいのに買い替えました。するとこれは、既存のヴィデオを見ながら裏録画が出来るし、二重録画もOK。初期化も編集もタイトル変更も、前よりずっと効率的になっていました。

視力と記憶力に欠陥を抱えた老残兵には、よく出来たテレビの番組ぐらいがちょうどよろしいようで、新しいプレイヤーのおかげで、テレビ視聴の時間と回数は絶対に増えました。その中の体験の一つを報告しておくことにします。

NHK-BSが紹介して、今年5月17日に放送し、8月に再放送したフランスのドキュメンタリー「検証　原子力発電『終わらない悪夢』」は、アメリカ・ロシア・フランスの原発の現場を押さえて、使用済み核燃料、つまり核廃棄物処理の問題を正面から取り上げた、実に恐ろしい傑作でした。制作は2009年、東日本大震災やそれによる東電福島原発事故の2年も前のことです。実に、問題をとらえる基本的姿勢が明確に違っています。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

中国鉄道事故と作業ロボット

加藤　辿

中国の高速列車事故とその対応に世界は唖然となった。

先行列車が雷で停車中に後続列車がノーブレーキで突っ込んだ事故もさることながら、落下した車体を調べもしないで、あろう事か穴を掘って埋めてしまうという乱暴な処理。それが批判にさらされるや再び掘り出すというおかしさ。更に次の日にはその横を何事もなかったように一番列車が通ってゆく。その一部始終をテレビが映し出す。

不謹慎な言い方だが、漫画の世界でもこれほど笑わせるギャグはなかなかお目にかかれないだろう。

専門家たちは口をそろえて「日本では起こりえない事故だ」という。確かに説明を聞けばその通りだ。しかし、翻って考えるとチェルノブイリ事故の際、同じ言葉を何回聞いたことか。にもかかわらずメルトダウンは三つの原子炉であっさり起きてしまった。そしてその対応。爆発の後、ヘリコプターで水を撒く映像をみて「二階から目薬」と思わずつぶやいた。これがパイロットを危険にさらしてまで行う価値のある作業なのか。現在進めている汚染水の循環利用システムにしても、初期になぜあれほど初歩的なミスが続いたのか。そもそも、バルブの閉め忘れなどは新しいシステムの立ち上げの際には日常茶飯事なのか？

疑問と言えば事故の初期、外国のロボットを使って調査するというニュースに頭をかしげた。日本と言えば世界一のロボット大国、それがなぜ外国に頼らねば事故の調査一つ出来ないのか。もう30年近く前の話になるが通産省（当時）の巨大プロジェクトに極限作業ロボットの開発というのがあった。これはまさに原発事故を想定したもので4足歩行で2本の腕と二つの目を持ち、がれきの散乱した放射能汚染の現場で人間に代わって調査や簡単な修理を行うロボットである。まさに今回の事態を先取りしたような開発だった。通産省の指導の下に、企業やグループが分担して開発に当たっていた。脚部や手、頭など個別の部分ではかなりなところまで開発が進んでいたと思う。あれは一体どうなったのだろう。

政府の研究プロジェクトは3年で終わるので、私は電力会社などの原子力関連産業が後を引き継いで研究を続けているものとばかり思っていた。しかし、実際には極限作業ロボットなど覚えている人は皆無だった。絶対安全という神話のためには、事故処理を目的するロボットなど認めるわけには行かなかったのだろう。

同じ事がいつまでも繰り返される。おそらく、もはや遅すぎると気づくまで。

「われわれが歴史から学ぶ事は、人間は歴史から学ぶことが出来ないという事実である　Ｂｅｒｎａｒｄ　Ｓｈａｗ」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

あの日から5カ月が過ぎて

木村成忠

3月11日仙台市の中心部にあるビルの6階のオフィスで長い凄まじい揺れに襲われた。自宅は幸い書棚の本が崩れ散乱した程度で被害はなかった。しかし、それ以降停電2日間、固定電話不通4日間、断水15日間、ガス断35日間、食料を求め市中徘徊10日間と一応の被災生活を強いられた。そこに重ねて福島原発事故である。地震直後ワンセグを観ていたため、たちまち電池切れにみまわれ、充電もできず携帯電話そのものが使用不能になってしまった。外界からの情報ルートは唯一ポケットラジオ（テレビの音声も聞けた）だけだった。15日夜電気が復旧し、惨状を映像として初めて観た時、あまりのすさまじさに絶句した。音声放送を聴いて想像していた状態よりももっと酷かったのである。また、通信網損傷の影響はきわめて大きく、近隣に住む肉親の安否確認さえままならず、全容を把握するのに10日ほどを要した。

私の出身地は石巻市。１９６０年5月、三陸沿岸に甚大な被害をもたらしたチリ地震津波の時は高校3年生で、石巻地区の被害をリアルタイムで見ている。現在実家には長兄夫婦がいる。今回の大震災では兄たち、親戚、同級生、友人、知人の多くが被災した。実家は地震で家屋損傷。家が海岸から20㎞ほど内陸だったので津波の直接の被害はなかったが、北上川の河口から逆噴流してきた大波が、用水路などを溢れさせ町中を水浸しにした。また、東松島市に住んでいた2歳上の兄は家屋流失。夫婦で避難逃走中波に追いつかれ、あわやの時、たまたまそばにあった松の木にしがみつき九死に一生を得ている。大勢の児童・教師が死亡・行方不明になったことでしばしばメディアに取り上げられている石巻市立大川小学校がある大川地区は私の母の実家があるところで、私にとって馴染みの深い土地である。母の実家の従兄は無事だったが、同地区内に嫁いでいた従姉はまだ行方不明だ。多くの人々の生命、財産を奪い、生きがい、生きる意欲、生きてきた証さえも剥奪し、故郷の風景も破壊し無残に変容させた自然の残酷さに憤りを感じる。

地元紙に今日も3月11日の犠牲者の死亡広告が載っている。そして、「昨日の死者」「遺体安置所案内」…。この惨禍、惨害の終焉はまだまだ先のことなのか。被災地には全国から支援・応援の手が差し伸べられていて、住民は「勇気をもらった」「元気をもらった」と気丈に応じているが、私にはその言葉の裏に秘められた、悲痛な慟哭、嗚咽の声が聴こえてくる。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

大震災とメディア

小池　勝次郎

東日本大震災発生から3ヵ月がたった6月上旬、被災地石巻・女川等を訪ねた。宮城テレビ放送田畑常務と実家が被害を受けた平塚営業局長の案内で仙台を振り出しに見て回った。被害状況は、まさに壊滅的でテレビの映像イメージを超えて想像以上であった。住宅地に横倒しになった漁船、津波に流され3階建てのビル屋上に鎮座する車、悪臭漂う魚市場、そしてかたづかないガレキの山々、高潮になると地盤沈下の影響で道路や軒先に海水があふれてくる日々・・・

しかし人々は、黙々と復旧・復興に向けて力を振り絞っていた。

この様子を見ていると、永田町政治の混迷振りとリーダーの機能不全や支援スピードの遅さに怒りがこみ上げてくるのを抑えることができなかった。

石巻市の河口に位置する日和山に登り、今は穏やかな太平洋から廃墟と化した市街地を眺めつつ思いをめぐらした。

あの大震災時、メディアは果たしてどのように対応したのか？そしてその機能と使命は、十分に発揮できたのだろうか？

各テレビ局の報道スタッフは、緊急時の情報が混迷するなか刻々と入ってくる津波や被災情報、そして映画の一シーンを見ているような自然の猛威を現地映像として切れ目なく放送し人々を釘付けにした。しかし政府が発表する福島第一原発事故についての情報には、振り回され混乱し不信感はつのり今も続く。

そうした中、社屋が被災しながらも休まず発行した新聞があった。石巻市の地元夕刊紙「石巻日日新聞」である。記者たちは懐中電灯と油性ペンで手書きの新聞を作り避難所に張り出し、情報を送り続けジャーナリスト魂を発揮した。その後この新聞は、各国のニュース報道資料を展示する米・ワシントンの博物館「ニュージアム」に、当時を知る貴重な資料として展示され永久保存された。またコミュニティＦＭ局が、各地で臨時災害放送局の免許を受けて立ち上がった。マイクを片手に安否情報や水・食料の配給場所、再開したスーパー等のきめ細かい生活情報を24時間体制で伝えた。反響は普段の数10倍。そこには、インフラが切断された中で情報を必死で求める姿があった。

インターネット上にも、震災情報があふれ世界中に発信された。一部の若者たちは、携帯やスマートフォンを使ってのツイッター情報やＳＮＳ（交流サイト）での交信で情報を確認し絆を深めたと言う。瞬時に位置情報で居場所確認をし、放射能線量や風向きを確認するネット情報が重宝された。しかし、ネットに疎い人や高齢者は取り残された。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

合唱音楽祭での鎮魂2曲

寒河江　正

東日本大震災の3・11から4ヶ月が過ぎた7月11日（東京第1生命ホール）と8月7日（大阪・ザシンフォニーホール）のそれぞれの演奏会場で、旋律と詩の言葉に震災の悲惨と悲しみが重なり胸に深く沈んで行く自分をみた。

東京は、住友金属混声合唱団（約80名全日本合唱コンクール25年連続日本一）の第4ステージ、混声合唱曲「永訣の朝（えいけつのあさ）」作詞は岩手県生まれの宮

沢賢治、作曲は鈴木憲夫。詩の内容は賢治の妹とし子との別れ、死に行くものと生きるものとの最後の心の触れ合いを歌ったものである。

「…うまれてくるたてこんどは　こたにわりやのごとばかりで　くるしまなあよにうまれてくる…」（＝また人に生れてくるときは　こんなに自分のことばかりで苦しまないように生まれてきます）

大阪は第18回東西4大学8早稲田、慶応、関学、同志社）合唱連盟演奏会。

住友金属と並んでこの演奏団体の活動は日本の文化財とまで言われている実力派だ。演奏は各校の持ち歌を歌った後の合同演奏（350名）男声合唱「岬の裏」作詞　堀田善衛・作曲　団伊玖磨の曲を聴いて感じた。紺碧の空に漂う白鳥のような白い船に、人生の死と生を暗示させるやや思索的とも思える内容だが、私はむしろ今回の津波で航海中の船が流され、瓦礫の上に打ち上げられた、幾艘もの白い船に想いがいった。大きさを問わずどの船にも彼方に光る未来への船出がある。詩の一部を示すと　「日は高く　海の辺（へ）の丘に登って見下ろせば　きらきら光る入り江の青に　安らう白い美しい船…美しい船よ　大いなる白鳥のように　安らう美しい船よ　翼を広げ船出せよ…この丘の白い墓　影一つない真昼の丘に白い墓　その墓の下にこそ　永遠の安らいと暗い影　丘の辺の白い墓は美しい船を見つめている…」

大震災の被害状況　死者　1万5719人、行方不明　4616人（2011年8月21日警視庁まとめ）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

パンドラの函とジャーナリズム

斎明寺以玖子

3・11から5ヶ月、日本人は、「想定外未曾有」の危機に瀕している。しかし本当の問題点を曖昧に先送りして呑気な有様は、80年昔に通った道そっくり、歴史に学ばない民族性の発露でしかない。本当にこれでいいの、情報革命が成った21世紀の今日に？

フクシマを期に、前世紀が産み育てた科学の鬼子・原子力と遺伝子組換えをパンドラの函だ、と真剣に懼れ苦しむ科学人が身近にいる。科学最先端に関わり細分化された専門の極を窮めるほどに、他分野の研究開発(者)に異議乃至疑義を呈することは躊躇せざるを得ない心的社会的土壌が出来上っている危うさ怖さ～それは、漱石の登場人物モデルとされ文筆を能くした地球物理学者寺田寅彦が、ユーモアの糖衣にくるんで口を極め警告してきたところに繋がると私は思う。

宣戦布告なしで中国大陸侵攻中という日本国家「非常時」に、〝昆虫や鳥獣でない20世紀の科学的文明国民の愛国心の発露にはもう少し合理的な様式があってしかるべきではないか〟等と、寅彦は忘れた頃に襲う天災への畏れと備えを欠く科学文明妄信に異を唱え文章を沢山書いた。が、大多数の民は耳には届かなかった。

一昨年辺りから情報公開やリーク、他方真摯地道な取材のおかげで、近過去歴史事象の秘匿され続けた真相が随分明らかになった。放送番組の役割は今なお、日本人の運命を左右するほどに、極めて大きい。

3月11日の私はNHK放送センターに居て、カタルニア民謡「鳥の歌」を宮田まゆみさんの笙二重奏で録音し終わる直前、大音楽スタジオが揺らいだ。8百年ほど昔、日本が天災人災に疲弊しきって末世と思われた時期に他力念仏を唱えることになる宗教者親鸞の幼青年期を描いた五木寛之氏の小説をラジオ第2「朗読」に採り上げる、そのテーマ曲を創っていたのだった。かつて、原発がどういう土地柄に建設されてどう地元民の暮らしを変え働き手は被曝死を免れないかを描いた「風の家」（作・高木達氏、福島出身）は、若山富三郎さんの一人芝居で1989年イタリア賞特別賞を獲った。その2年前、令息一家の転勤についてアメリカで暮らし初孫誕生をサポートする被爆女性を描いた林京子さんの「花わらい鳥うたい」は、怒りを露わにはしない作風をコンクール直前にチェルノブイリ事故で全世界騒然となっては印象が弱いとされ、「友よ～「祭の場」「ギヤマン・ビードロ」より」（1978）に続いて賞を逸していた。放射線による内部被曝の惨こそ人類の未来にとって最大の脅威と、長崎被爆33回忌以後書き続けてきたこの作家は、原爆誕生の、不毛どころか負のスタート点グランド・ゼロに身を置いて後に『長い時間をかけた人間の経験』を書き上げた。アメリカと日本政府が意図的に隠してきた内部被曝の危険性を訴え続け、《しかし僕は希望を捨てません、希望は一般の人たちです、庶民が生きのびる智恵と力を得るでしょうね》と作中S医師が語る。平和利用という装飾語で自国民も瞞したアメリカ高官の時効後証言を聞いてもまだ、原子力は国力の支えと称し私利にしがみついて脱原発を排する各界首脳の蒙を、1952年飯沢匡当時アサヒグラフ編集長が命懸けで発刊した「原爆特集号」に反応した高校生の私は、嗤う。否、怒りを禁じ得ない。

被爆者手帳を容易に交付しない日本政府は、原発事故時20キロ圏内居住民避難勧告を渋々出し、アメリカは80キロ圏内の米人全員～オトモダチ海兵隊も含む～を即避難させた。その違いは《人の命、人権に対する認識の度合いの違い》なのだ。広島・長崎につぐ第3の原子爆発フクシマ後、幼児に被曝量検査を望む母親たちをヒステリーと言い捨てて憚らない人物らに国政をなお委ねるのか、日本の有権者たちよ。

あの日の後、メディアは何を伝えてきたかを廻り、日本女性放送者懇談会が9月13日夕、【NHK・ETV特集「ネットワークでつくる放射能汚染地図」の制作者が伝えたかったこと】をテーマに例会を開く（参加歓迎）。現在の私は、宮沢賢治の無災害理想郷を夢見た作品や寅彦の災害関連随筆を10月第2週からオンエアーするべく作業中です。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「放射能から子どもを救え！」と言うとき・・・

桜井　均

3・11の東日本大震災・福島第1原発事故から5ヶ月がたって、メディアの言葉遣

いに微妙な変化が出はじめています。当初、福島県は、太平洋岸に位置する「福島第1原発」が福島全体を代表するのを嫌がっていました。しかし、事故の収束にめどがつかず、県内各地にホットスポットが発見されるようになると、「風評被害」より実際の「放射能被害」を問題にするようになりました。

私は、このところデジタルカメラで原発関係の記録を撮っています。8月6日には、「素人の乱」というグループが呼びかけた「東電前・銀座 原発やめろデモ」に参加し、その模様を内側から撮影しました。原爆と原発を結びつける言葉が聞けるかと思って3時間ほど歩きましたが明確な答えはありませんでした。老夫婦が二人とも杖をつきながらデモの最後尾をゆっくりと歩いていました。その様子を撮影していると、おばあさんは「今日は原爆の日ですね」と言い、おじいさんは「孫たちのためにね」と言いました。傍らを、小さな子どもたちが親に手を引かれてぴょんぴょん歩いていました。おじいさんが築地のほうを指差して「水爆のときにはマグロをたくさん埋めましたね」と話し始めたので、私も子どものころの記憶を重ねて話しながら歩きました。こうしている間にも、福島のホットスポットに取り残された子どもたちや妊産婦たちは被ばくしています。解散地の新橋駅前SL広場まで行くと、藤波心という歌手が「ふるさと」を染み入るように歌っていました。大群衆のなかにロスジェネやワーキングプアの若者たちもいたことでしょう。ふと、東北と東京をあわせた「東日本難民」という言葉が浮かびました。

8月17日、衆議院議員会館に福島の子どもたちが「自分たちを放射能の中から救助してほしい」と陳情に来ると聞いて、撮影に行きました。菅首相や高木文部大臣の出席を求めていましたが、会場に二人の姿はなく、各省の担当者が居並ぶだけでした。翌日のワイドショーで、首相や大臣が出席しなかったことをまともに疑問視する報道は皆無でした。子どもたちは、放射能の除染を願いながら、もう手遅れかもしれないと思っているようでした。彼らが友だちから預かった手紙には、「わたしはふつうの子供を産めますか？なんさいまで生きられますか？」と書いてありました。

3日後、里山保全を訴える「24時間テレビ」が、古希のキャスターのチャリティマラソンを大々的に映していました。むろん、ゼッケンに「脱原発」とも「子どもを救おう」とも書いてありません。そういえば、計画的避難区域に指定された飯舘村は、エコ農業で生きようとしていた里山の村です。平地と違って、山に降り注いだ放射能は容易なことでは除染できません。森の再生には百年かかるとも言われます。

しかし、まったく希望がないわけではありません。いま、福島地方裁判所郡山支部で、「ふくしま集団疎開裁判」が進められています。その弁護団に、石川県志賀原発差し止め訴訟（2006年）で裁判長として「原発を運転してはならない」という判決を下した井戸謙一氏が加わっています。その判決のなかにこんな文言があります。「炉心溶融事故の可能性もある」「外部電源の喪失 非常用電源の喪失など多重防護が有効に機能するとは考えられない」、福島第1原発の事故を予告するような言葉です。よくうやく、子どもの「集団疎開」と「脱原発」がワンセットになって動き始めました。

「日々被ばくする子どもたちを前にして、テレビは可能か」、どこかのテレビ局が「子どもを救え」というキャンペーンを始めないものかと期待しています。これを書いていると、アフリカのソマリアで40万人の子どもたちが餓死寸前の状態にあるとニュースが伝えています。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

大震災とジャーナリスト

菅根英二

「歴史に学ぶ」「現場に神宿る」と書かれた色紙が手元にある。筑紫哲也さんと中坊公平さんのものだ。時代への遺言と題した番組に出て頂いた時のものである。お二人が健在で現役であったら、いま、何と言われるかと思う。

未曽有の大震災にじっとしておれず私は4月上旬に岩手に入った。大型貨物船が防波堤に突き刺さる釜石の集落で80歳のお年寄りから修羅場を聞いた。「もういいからと手を振って隣の92歳の老人が逃げずに亡くなった」と。近くのリアス海岸の谷では駆け上がった波の舐め具合が生死を分けていた。遅ればせながら大震災の一端はわかるのだが、記者としてやってきた身には手が届かない渇き感がぬぐえない。

4月と6月には学生を連れ宮城にボランティアで入った。それとは別に6月にもう一度ひとりで岩手を訪ねた。陸前高田の生き残った1本松にも新聞に報じられたものをなぞるじれったさを感じる。大震災にどう関わるか？自らが見つけて照らす一隅や現実の発見はやっぱりいまの私には難しい。研究者ではないそもそも記者の私がいる。

真実がどこまで伝えられているか。宮城県多賀城市のボランティアセンターであったアメリカ人英語教師が言う。「アメリカのメディアには遺体がごろごろ出ている。なぜ日本から戻ってこないと家族がね」。日本では遺体報道はなかった。死者への尊厳、よくわかるが2万人もの死者を出した惨状がいまひとつ伝わらない。1923年の関東大震災映像には炭化した遺体が記録されている。いま一度、ジャーナリズムとは何かを議論してみる必要があるだろう。

「日本特有の原発事故、共謀（馴れ合い）の文化」とフクシマをアメリカ紙は報じた。電力会社、政府、保安院の関係をグルと書く。翻って見ると、事故現場にもマスコミのカメラや記者が入らない。高濃度汚染水の漏れを1枚の発表写真だけが伝える。敷地内映像もマスコミ自前のものはない。燃料棒プールも発表映像。食い入るように見た。水面に桜の花びらしきものを認めた。建屋が吹き飛んで風で運ばれたものか？それなら本物映像だろう。「戦争の最初の被害者は真実だ」と筑紫さんがよく言われた。真実をどう伝えるか。歴史に学ぶ必要がありそうだ。それには中坊さんの現場主義である。自戒を込めて思う。

一点、後輩たちの頑張りに触れたい。BS—TBSが放送した『記者たちの眼差し』を見た。大震災に遭遇したり応援で駆けつ

けた記者やカメラマンたちが24のエピソードを自らの語りで綴った秀作だった。もちろん自分たちで撮った映像がある。「生き死に」の場で、ジャーナリストとして、人として、「どう向き合うのか?」の究極の問いを突きつけられた記者たちが戸惑い苦悩していた。正直に語られた「私」にジャーナリズムの熱や希望を感じる。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

FM八ヶ岳を聴いて

田中 秋夫

3・11の大震災以来ラジオに対する評価が高まっている。特に今回はコミュニティFMが被災地で大いに活躍したと報道されている。

そんな日々の中、山梨県北杜市に滞在中、地元のコミュニティFM局「FM八ヶ岳」の「デイ イン ライフ」という番組を聴いた。同局はNPO法人として2006年に開局し「自然との共生」「市民に開放された放送局」をテーマに市民生活に密着した番組作りを目指しているという。7月25日（月）のこの日はゲストに甲府市在住の慶応大学文学部教授川村晃生氏を招いていた。同氏について予備知識は無かったが、放送後にネットで調べてみると現在自然保護団体でつくる「自然保護連合」の代表を務めると同時に「リニア市民ネット」を設立して山梨県を通るリニアの問題を提起しているという。

番組で氏は主にリニア中央新幹線の必要性について疑問を呈していた。

「人口減の時代に東海道新幹線の利用客が減っているなか、もう一本超高速鉄道が要るのか」「南アルプスを貫通するトンネルを掘って地下水の流れを変え森林や生態系の環境破壊につながるのではないか」「リニアが通れば地方が活性化するというのは嘘だ。高速道路を張り巡らせ、新幹線を通した結果、東京への一極集中が進み、地方の人々が都会に吸い取られる『ストロー効果』の方が大きい。」「超電導の人体への影響は完全に無いのか、安全かどうかのデータが公開されていない。」と言う。さらに氏は「JR東海が独走してこのプロジェクトを進めているが、東電・原発問題に象徴されるように日本は観客型民主主義であって、参加型民主主義ではない。」「人間不在、効率優先の考え方が、リニアの問題に凝縮されている。発展ばかりを追い求める20世紀的な価値観からは、もう離れるべきである。文明、社会を見直し、身の丈に合ったものにすべきです。」と語っていた。番組を聴き終わってなかなか考えさせられた。同時に地域密着を標榜するコミュニティFM局の理想的なあり方を教えられた感があった。

現在全国に240局以上あるコミュニティFM局が市民に開放された放送局としてこのような番組を制作していけば日本の民主主義も観客型から参加型に転換することになるのではないだろうか?

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

脱原発を思う夏

長沼士朗

8月13日、日本ジャーナリスト会議の今年度の受賞作品の発表会が行われたが、冒頭JCJ代表の吉原功さんは、昭和の戦争から憲法9条が生まれたが、フクシマを脱原発元年にしなければならないと挨拶した。

今年の夏は節電のこともあり、首都圏で惰眠をむさぼるわが身も、原発の放射能災害に頭をめぐらす日々が少なくなかった。

7月3日には、NHKの教育テレビでノーベル賞作家大江健三郎と、ビキニの水爆実験で被曝した第五福竜丸の乗組員大石又七さんが対談した。

その中で大石さんは、原子力の平和利用の名目のもと、日本に原発を導入するために、ビキニ事件が意識的に人々の関心から遠ざけられたことを明らかにしている。

「原発が導入されてから、日本の社会はものとか金に慣らされて、そういう生活をしないと幸せではないと考えるようになり、いのちよりお金が大切な社会になってしまった」、大石さんのそんな言葉が印象的であった。

一方8月14日、やはりNHK教育テレビの「こころの時代」では、作家で在日三世の徐京植（ソ キョンシク）さんが、「フクシマの原発事故は、避難を強要された住民の生活を根こそぎ破壊した。それが今度の放射能災害の本質だ。」と語り、それを許したのは、高度経済成長時代に安楽全体主義が日本の社会に蔓延したからであり、そうした風潮が、核や放射能に対する人々の関心を風化させてしまったと指摘している。

土壌や食材の汚染、内部被曝、放射性廃棄物など、今度の事故で明らかになった放射能の問題を考えると、私達が脱原発の道を選ぶのは必至のことのように思える。

同時にその道は、戦後の日本人が、物質的な豊かさを求める過程で忘れてしまったものを、もう一度見つけ出す道であるのかも知れない。

新しい人間のライフスタイルが、そうした模索の中から生まれてくることを、今心から願いたい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

三つの原発関連番組に感銘

萩野 靖乃

1、ETV特集「ネットワークでつくる放射能汚染地図―福島原発事故から2ヶ月」

2、ETV特集「大江健三郎・大石又七・核をめぐる対話」

3、こころの時代「私にとっての3・11・フクシマを歩いて・徐京植」

いずれもNHK・ETVの番組である。

1を大森淳郎と担当した七沢潔は、チェルノブイリの事故以来、一貫して原発問題に関心を持ち続け、能登原発のドキュメンタリー、東海村原発事故のドキュメンタリーなど、NHKの原発問題を忌避する風潮の中でも毅然としてつくりつづけてきた人物である。

あの番組が通り一遍の原発番組と全く違った根本的な問題を提起し得たのは、まさに彼が今までの番組で築きあげた人脈によるものである。その中で「原発事故が人々から奪うものは、愛する土地、愛する仕事、愛する人々、愛する動物たち、人間の『存在の基盤』そのものである」ことが伝えられた。

2は大江健三郎氏がビキニの水爆で被曝した大石又七氏と対話した番組である。

この番組の素晴らしいところは、〝誰がこの事故に対して責任をとらなければならないか〟という視点をもって原発導入の歴史について、はっきりさせているからである。大石又七氏は憤っている。その怒りが少ない言葉をこえて伝わってくる。大江氏は「責任をあいまいにする―これが日本ですよ」と言いつつ「これでは日本は行き詰まりますよ…つきつめて調査をし話し合っていく…そして原発を廃止する」。この時期にこの企画を立ち上げた東野真の思慮の深さに敬意を表したい。

3は、放送人グランプリを受けたことのある鎌倉英也の最新作。在日2世の作家徐京植氏登場というところに思いの深さが見える。

氏は「根こぎ」という言葉を使いながら、現地から逃げなかった人達と会っていく。

6月20日54歳の酪農家の自殺、徹底的に根こぎにされた難民達の一人。その心情にどれ程の思いをはせることが出来るのか。南相馬の海で感じたこと。「私がここで現実と思っている生活というものが現実ではない。放射線がまき散らされているこの現実を直視するのは困難。…それがどんなに困難でも現実を見よ!」

この事故が、日本人に何をもたらしたのか、根源的な問いをぶつける衝撃的な番組。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

僕たちの後ろめたさ

堀川とんこう

イヤな夏だ。震災と原発の深い傷は、乾いたかさ蓋のようなもので覆われていき、被災地を遠く離れて住む僕たちの痛みは次第に和らぐ。

しかし、恐ろしい事態が実は進行し続けているのではないか、という苛立ちが意識の底から消えないでいる。

原発事故の直後の、テレビが保安委員会と東電の会見を垂れ流していた「発表報道」の段階で、僕たちに植え付けられたものがある。大本営発表は信じられない、と。発表は日ごと夜ごとに変化し続けた。

広報担当者の、今思えば気の毒な限りだが、どこか他人事のような、冷めた口調は興味深いものがあった。心にもないことを言ってるな、と聞く人にわかるようにしゃべっている、と見えた。彼らは内容に責任をもてなかったのだろう。

と同時に、僕には彼らが「悪いのは本当は私たちじゃないんだけどなあ」といっているようにも見えた。原発は、やらされたのだ、私たちも被害者だ、といったような。

犯人探しは復興の役に立たない、という言い方がある。そうだろうか。僕たちはおそらく共犯者なのだ。僕たちが原発に手を貸した時に、すべては始まった。

そこに立ち戻って議論しないと、今後の原発を考えることはできない。

「きずな」「支え合い」「頑張ろう」の大合唱は、真犯人にとって誠に都合のいい筋書きではないだろうか。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

メディアのヘコトバ〉で考える

前川英樹

3月11日、戸隠スキー場にいた。休憩していた食堂の天井の電灯が、左右に幅一メートルほどだっただろうか、大きく揺れた。速報で震源地が東北だと聞いて、タダものではない地震だと知った。

宿に戻って見たテレビの津波映像は圧倒的だった。茫然としているうちに、原発事故の情報が入ってきた。錯綜する情報の中で、今日明日は帰れないと覚悟した。

その深夜、長野県北部は震度6の地震に数回襲われた。日本沈没が始まったとホントに思った（…いまや、沈没しそうなのは日本列島ではなく、日本そのものだ）。

翌々日、東京に戻って少しずつ色々なことが見え始めて思ったのは、この事態がどれほどの社会的歴史的事象なのだろうかということだった。多くの人々がそう思ったに違いない。日々伝えられる被害状況や対策活動の情報に愕然としつつ、一方では「方丈記私記」（堀田善衛）や「江戸安政大地震」（野口武彦）を再読したのは、そうすることが、この東日本大震災と意味を考えることだと思ったからだ。直感的に、この大災害によって日本の近代が問い直されるだろうと思ったのだった。

そこまでは、私にとって疑問はない。問題は原発事故を、東日本大震災という自然災害とどういう関係で考えるかということだ。「想定外」という時の想定そのものの誤りによる人災というのは、確かにその通りであろう。また、事故発生後の対応が問題といえばそれもそうだ。けれども、自然災害と原発事故との関係はそのように説明的なものなのだろうか。

実は、私たちはとんでもない領域に足を踏み入れてしまったのではないか、という惧れ（そして畏れ）に向き合うべきなのだ、と思う。そして、それをメディアは専門家や有識者、知識人に語らせるのではなく、メディア自身のコトバとして考え、語れるかどうか、それが3・11以後のメディアの課題であろう。

震災直後、仙台の歌人大口玲子さんは、「東北にいるのに、東北の声が聞こえない。その悲鳴が、叫び声が届いてこない。東京のスタジオから発信される言葉のおおかたが、私には妙にそらぞらしく響いてしまう」と書く（3・27 毎日新聞「歌壇」）。それは、「東京のスタジオ」が自分の言葉で語っていないからだ。

メディアはいつから自分の言葉を失ったのか。そして、再びそれを持てるだろうか。メディアにとってのヘコトバ〉とは、もちろん言語だけではない。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「俳句王国」

山縣昭彦

全国放送にはほとんど載りませんが、当地方（茨城県在住）はいまだ復興まならず、被災当時の惨憺たる状況がつづいています。損壊した幹線道路、液状地、被災住宅など手つかずのままで、海岸には時たま御遺体の漂着も見られます。

実際に被災地の内側で暮らしていると、世間では好もしい話やうるわしい話が先行しているかに思えてなりません。報道は現実と虹色の夢とを、未整理のまま伝えてはいませんか。

さて近況です。体調は、やや元気です。停酒ほぼ1年。放送人句会にも長らく御無沙汰ですが、先日NHKのテレビ番組「俳句王国」で、鍵和田柚子師から特選を頂き

ました。

余震なお憮然たる雉ただ歩く

思い出しました。春にも宇多喜代子師から特選を頂いていました。

おでん食うそこばくの夢分ち合い

それにつけても夢を分け合うことの難しさを、ほとほと実感しながら生きています。この国はもうダメかなあ、などと思いつつ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「その時」と「その後」

山路家子

3月11日の「その時」、私は地下鉄銀座線渋谷駅で電車に乗り、発車を待っていました。ガクンという揺れに、「こんな下手な運転、はじめて」と思った。ややあって、車内アナウンス、「地震のため、安全確認をしています…」。本を読みながら待つこと1時間以上だったと思う。

その後電車を降ろされて、目にしたものは、改札口の外に溢れた人、人、人。気がつけば、「大丈夫か」のメールが、家族、友人から届いていた。そして「JRは本日、すべて運休します」のアナウンスが聞こえてきて…事の重大さが判ってきたのでした。

公衆電話の行列、トイレの行列、途切れることのない歩道の人波…私は、私鉄運転開始を静かに待ちました。

いつも持ち歩いている水筒の、何と有難く、心強かったことか。それにしても、深夜に帰り着いたマンションのドアの開閉に難儀した時のショック！　地震の強大さをあらためて怖ろしく実感したことでした。

6月はじめ、私は気仙沼市唐桑に参りました。お見舞いとお悔み、長年続けている「森は海の恋人」の植樹祭のためです。

大震災から3ヶ月経っても、高速道路はガタガタ。そして美しかった海辺には、仰向けになった車や地面から飛び出して倒れている電柱、ありとあらゆるものが横たわっていました。辛うじて車は通れたものの、水溜りが多くて、地盤沈下の凄さを物語っていました。9月の大潮が心配されています。

「欲しいものは何？」　被災者に聞いてまわった時の答えには、胸が潰れそうでした。「仕事が欲しい」誰もが同じ答えでした。

福島原発事故には言葉もありませんでした。これまでの事故、特にチェルノブイリの事故から、日本の為政者は何も学んでいなかったのでしょうか？

「脱原発」に異を唱える人達には、原発事故は日本だけの問題ではないことを認識してもらいたい。外国の小さな新聞でさえ、日本の「フクシマ」は記事になっていると、海外に住む友人から心配のメールでした。

東日本大震災と福島原発事故から立ち上がるために、どれだけの年月を要することか！

被災された方々のために、「いつも想っています」「いつも祈っています」としか言えない私ですが、それでも良ければそのために長生きしたいと思っています。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

メディアのよき変化

渡辺紘史

震災後5カ月、今後メディアがへよき変化Vを遂げるために、絶好の研究素材ができた。「原発事故報道」そして「菅降ろし」報道だ。

双方向的当事者的なソーシャルネットワークで語られる原発情報に比べ、庶民への影響力の強いテレビメディアが垂れ流すへチョイかじり情報Vが、むしろ風評被害をもたらしたのではないか。メディア、政財界が一体となって繰り広げた「菅降ろし劇」は、結果として、管総理が遅らせた以上の復興の遅れをもたらしたのではないか。こんな抜きがたい疑問を、私は持っている。

テレビ、週刊誌、新聞、これらメディアは、顧客の関心興味に奉仕するものでもある。が、やり方や手順がまずい、態度が悪い、けしからんというような、面白く分かり易い、ことをあげつらうへ批判のための批判Vではなく、ことの本質にかかる議論をしてきたかどうか。想定外の津波、原発事故というが、メディアが想定できなかったのは何故か。安全神話の中で、メディアの役割と責任について真剣に議論したのかどうか。今後検証されなければならないことが多いと思う。

その意味で、今年の夏の震災と戦災に関する特集番組の中に、その検証の兆しが見えたのはうれしいことだった。

先日、昨年NHKで放送されたドキュメンタリー「日本海軍400時間の証言」が出版された。海軍参謀たちの証言テープから、国家や組織が、組織を優先、失敗責任の所在を曖昧にし、個人をいとも簡単に押しつぶしてしまう現実を綿密に検証した番組で、ご承知の方も多いだろうが、そのへあとがきVを読み、得心がいった。

番組でキャスターを務めたプロデューサーの小貫武氏は言う。彼は現在、原発問題を取材中である。少し長いが引用する。

「取材中、何度も思いをめぐらさざるを得なかったのは、日本人が戦後断ち切れないままでいる『負の連続性』とでもいうべきものだ。最悪の事態を想定せず、楽観的な予測に基づき、作戦を立案する。最前線に無理を強い、幹部は責任を取らない。外交努力、説明責任を果たすことを怠り、諸外国から孤立する。真実を国民に公表せず、現場を軽視し、ひいては国民の命を危険に晒す。（中略）これらは何もこの番組で描いた話ではない。今回の原発事故の関係機関にもそっくり当てはまることである。（中略）原発を巡る、いわゆる『安全神話』がいかに作り上げられてきたか。そこに『やましき沈黙』はなかったのか。そして、私たち自身も、その危険性を感じながら、あえて突き詰めて考えず、空気に流されてこなかっただろうか。徹底的な検証が必要だろう。（中略）

逃げ出すことはできない。自らにかかる責任の重さを、今あらためて感じている」

こうした制作者たちが存在する限り、メディアのへよき変化Vは必ず訪れる。（尚8・15ETV特集で、NHK小出五郎氏も同様の反省の弁を述べている）

消夏座談会　夏のジャーナリズム横断図

恒例に従い、当会TVウオッチャーの面々によるタテ・ヨコ・ナナメの映像（および ラジオ）の動向を探ってみました――

A　平和を考えるこの季節、今年はとくに災害と原発というグローバルな回顧もからめ、視聴者に、国家と国家、国家と個人の関係など、多彩な視点を提供する番組が多かった気がする。

B　考えてみると今年は大正100年、開戦70年、そして戦後66年だ。その間に9・11があり、その上に3・11が重なった。今年の前半のメディアを支配したのは3・11だが、その中での8・6、8・9であり、8・15だ。あるいはそこに大正もからんでくるかもしれない。そんな大きな枠組みで話を進めたい。まずは3・11から。

原発報道

C　まず現地報告、中央や応援部隊そして緊急取材で現地に入ったものの報告などがあり、そして原発の記者発表、被災地、避難所があり、がんばれタレント部隊、エピソードだ。そして第2段階としての原発。それまでの保安院発表でない、他メディアの情報とからんだもの、初期の原発報道への打ちかえしなどが出てくる。

D　初期の発表報道に疑問はないのだろうか。

A　発表報道をみていると、「東電は、政府はこう発表している」とだけで、発表する担当官のキャラクターのせいでもあるが、だんだんに「これって、おかしい。変」と思えてくる。

B　保安院の発表、東電の発表と枝野の発表があり、枝野がだんだん重要度を増した。**C**　保安院も東電も「おれたちのせいじゃないよね」という態度が見えた。

D　そう。それが貯まって、「じゃあ、本当に悪かったのは誰？」についてテレビは語らないのか、の不満が貯まる。

A　初期の段階で東電は隠そうとしたし、原子力委も政府も下手なことは言えないと口を開かなかった。国際的には政府が発表しなかった情報が洩れ、世界は日本国内では意外なほど過敏になっていた。**「アメリカから見た福島原発事故」**（8月15日、ETV特集）を見てその事情を納得した。

　放射能のことは文科省でも掴んでいながら、パニックを起こさせてはいけないという変な理屈で隠し立てをした。記者クラブはそれに対し質問すらできなかった。記者クラブはやはり大本営発表の神輿担ぎだと思った。

B　質問する知識がないのだろうか。科学部の記者がこのときだけ記者クラブへ行くことはできないのだろうか。

C　それを破ったのがNHKの科学部水野倫之。民放ではTBSの崎山。

D　民放にはNHK科学部のような専門スタッフはいない。局外の権威を入れて処理していた。

A　こんな時こそ科学技術部的な、学者としての専門家でなくジャーナリズムとしての専門家が必要だ。

B　もともと日本のジャーナリズムは文系なのだ。役人や政治家になりそこなった連中が多い。理系のことをわかり易く通俗的に伝えたのは池上彰くらいだ。

C　仮にそんな専門の能力があっても、現在の民放の編成はそれを生かせない。そこがつらい。

D　NHKには水野倫之、山崎淑行など科学番組ばかりやってきた専門家はいる。しかし層は厚くない。東電は「想定外の災害」と言ってやっつけられたが、メディアも想定外の状況なのだ。

A　これまで原子力学者は御用学者と反原発学者に完全に振り分けられ、御用学者の話だけが記者たちの知識になっていた。

B　雑誌「世界」は5月号（4月発売）で小出裕章京大教授の発言を掲載している。報道の現場はこれをみないのだろうか

C　まず、みない。

D　石沢氏、東野氏など原子力の専門記者はアンチ御用学者と交流があり、スリーマイル、チェルノブイリ、東海村と一緒に動いてきた。それで**ETV特集「ネットワークでつくる放射能汚染地図」**ができた。彼らは事故の翌日、3月12日から動いている。その時点でNHKは取材班を作っている。それが生きたのが、玄侑x吉岡忍の座談会（4月3日放送）で、次に本格的に『汚染地図』を作った。こんな系統的な取材をしているのは他にない。

A　当初から東電や政府の発表は違うぞ、と思いながら「汚染地図」に至るまでは時間が必要だった。当初のマスコミ全体の姿勢は政府と同様パニックを起こしてはいけないという自己規制で、時間をかけてその規制がゆるむ過程があった。

B　ゆるんでやっと事実が語られるようになった。

C　神保哲生氏などはネット情報を基調にしていたが、テレビはそうでないので断絶が起きた。

D　ネット情報をテレビの現場はみて、知っている。しかし国が持っている姿勢が巨大マスコミにはそのまま移行した。こんな事態のときは国と同質のものが自ずから生まれる。巨大マスコミでないネットでは責任が小さいから自由だ。

A　専門ジャーナリストがいないと言ったが、原子力に原発事故にどんな距離感を持つべきかという感性が欠落しているから政府的な規制を規制と感じない。自己規制しているという意識はないから、事態とメディアの間に緊張感が全くない。それが問題だろう。

B　やはりメディアにとって想定外なのだ。

C　原子力平和利用をやれやれと言っていた時代、60年代の終わりにに原子力担当記者をしたことがある。今とはまるで違うかもそれないが、文系としては最初猛烈な勉強をした。専門知識がないと取材ができない。そうやって取材すると反対派に情報はほとんどない。ビキニはあったし、原水禁の運動はもちろんあったが、そこでも平和利用は別だ、という考えが脈々とあった。原水禁の運動が「ふたたび被爆者を出すことを許すな」の被爆者の中に原発の被

曝も含むのだと言ったのは今年の記念式典が初めてだ。

東海村は見直しのチャンスだったが見送られた。現在原発はアメリカが1位、フランスが2位だが、日本以上に事故対策が進んでいるわけではない。日本より進んでいるのは救援にも来たロボットの計測機器、汚染除去装置などだ。米、仏ともに小さな事故は沢山起こしている。そのジャーナリズム対応は進んでいる。

D 日本の原子力の技術は進んでいて、米仏で起こした小さな事故を防いできた。

A いや、遅れているのじゃないか。

B 福島の1号機は非常に古いタイプで、小出五郎の「アメリカから見た福島原発事故」で言っているが、アメリカではいまや廃炉にしているものだ。その意味では遅れている。

C それを上手く使って、小さな事故は隠したのかもしれないが、安全神話を続けてきた。みんな虚をつかれたというのがホンネだろう。

D 東海村のときは二人死んだ。あれとスケールは違うのだが、東海村は全く教訓として生かされてはいない。

A 話をもどすが、「日本人には原子力の利用はまだ早すぎた」という言い方がある。日本の原子力技術は決して進んではいない、というのと同じかもしれない。

原子力アレルギーという言葉が再び思い出された。原子力への後ろめたさというのは日本人全体にもマスコミにもあった。原子力利用を始める前に見きわめておかなければならないことをしなくて始めた後ろめたさ、だろうか。

B 戦争中の「お国のために」と同じだ。

C そうだ。戦争と原子力は共通している。

D 誰もが多分メルトダウンしているだろうと思いながら「してなきゃいいなあ」と思っていた。実は地震から2・3日のうちにメルトダウンしていた。誰もが「そんなの早く言えよ」と思ったが怒らない。

A メルトダウンについては朝日新聞が早く書いた。少し原子力の知識のある人はそう思っていただろう。それを確かめることができない。そこで「不確かなことを言ってパニックを起こしては」という論理になる。

B 大石又一さんは「被曝ということでは原爆も原発も同じだ」と言う。「原発の方がきれいだ、とか、平和利用などありうるはずがない。事故が起これば同じ被曝で、日本人はすでに3回経験している。その認識がないからある種のごまかしにみんな乗ってしまう」と言う。彼はそう一貫して言い続けてきた。

C 原爆反対はだんだん観念論になっていった。一方原発は戦後経済発展の基礎で、正力松太郎のマスコミ対策、中曽根のリーダーシップで進み、安全神話が生まれ、それにすがる国民のすりかえ論理が生まれる。

D 村上春樹がスペインで演説したことの後追い報道もほとんどなかった。

A 村上の雑文集にはあの演説全文が掲載されている。実にいい演説で、日本人はもっと話題にすべきものだ。

B 関口が司会している「サンデーモーニング」で寺島実郎氏が言及して「原爆と原発を同じ言葉（核）にしているのは間違いだ」と言っていた。

C 徐京植（ソキョンシク）東京経済大学教授が早朝番組「心の時代」で、「原発は平和利用だ、と言うが、アメリカが原爆を投下したときも、これで戦争が終わる何百万人の命が救われる、と言った。すると、原爆も平和利用じゃないか」という学生の意見を紹介していた。

D 大江健三郎も同じことを言っている。

原子力平和利用はアメリカが水爆の開発でソ連に後れをとり、国連にアイゼンハワーが乗り込んで行って「原子力はいまや平和利用にすべき時代だ」と演説して拍手喝采を浴び、国の威信を取り戻したときに始まる。ところがアメリカはすぐにビキニで実験をやり世界の顰蹙をかう。米ソ冷戦の中で、日本の原水禁運動は分裂し、核抑止論が結局核保有国の勝手に過ぎないことをみた大江健三郎はひたすら核廃絶だけを言うようになる。

A 今回の原発報道になんらかの規制、要請はなかったのだろうか。「風評被害などを考慮し、発表はここまでにとどめて欲しい」とか…。

B 政府の内部ではあっただろう。新聞・放送・週刊誌の3マスコミへの要請は聞いていない。マスコミの中でなんとなく自己規制したことはあるかもしれないが、規制する前にとにかく情報が乏しかった。

C 忌野清志郎の10年ほど前に出た原発ソング（反核ソング）を東芝ＥＭＩが自己規制したが、俳優の山本太郎が泊原発再開の情報を知って北海道知事に怒鳴り込みに行ったとか、は新聞に出ていない。ネットには大きく出ている。だから何かあるんじゃないかと思う。

B 「ただちに健康に影響がない」と政府もマスコミも全く同じ言葉で言った。あれも、それ以上突っ込めないのだ。

C 小出裕章京大教授は国会で「今回の放射能は広島の29倍」と証言した。それが報道されていない。

D 保安院の「レベル7、チェルノブイリの1割前後」との発表に基づいて計算すると長崎、広島の40～50倍になる。東京都の被爆者団体協議会の会報にそのことを書いたがもちろん他のマスコミには出ていない。

A できるだけ小さくあって欲しいというみんなの願望のせいだろうね。

B 子どもの45％に甲状腺異常の可能性と言われている。

C 放射線の影響については基準はあるがあいまいなところがある。

D 興味深い番組はいくつかあった。ＢＳの**「広島の黒い太陽」**、東大の都築雅夫という原子病の医者が患者のデータをアメリカに全部渡して日本は全く残さなかったという報告。8月6日の**「生かされなかった諜報記録～原爆投下の真実」**では特命を帯びている飛行機のコールサインは日本側でわかっていて、それが今日飛ぶということもわかっており、それが長崎へ飛んでいるとわかっていながら何にもしなかった、という。

A 自分たちに不利な情報の受け入れをリジェクトしたわけだ。

B 長崎への原爆投下を察知した海軍参謀の井本中佐が、搭乗する紫電改から見た被爆直後のなにもかも消えてなくなってし

まった広島の街の話、そして原爆投下察知に関するあらゆる情報を燃やした人物の話が強く心に残るが、それだけに、この話が今になって初めて明るみに出たことに疑問が残る。

原爆投下は誰しも想定外で、空襲警報もない奇襲攻撃だったと思われていたが、実は情報をつかんでいた人間がいた。その情報が伝わらず、というより握りつぶされたのは、理由なき思い込みと理由なき楽観論。結果として20万人を超える命が奪われたという事実に、今われわれが向き合っている津波、安全神話の中にあった原発の事故、政府、東電の対応、マスコミのあり方とが重なる。

C NHKの**「日本人はなぜ戦争に向かったか」**の戦中編「戦線拡大」で描かれた権力、大本営のあいまいさと日本人の体質も見事に今回の原発報道と重なった。

D この戦中編は1月～3月放送の陸軍内部のものを引き継ぐもので、ここでも自分たちに不利な情報を得て、その対策を講じるということをしていない。日本人の体質として考え直す必要がある。

A 加藤陽子東大教授の**「さかのぼり日本史」**のテーマもそれだ。戦争中のことは戦後何年か経ってやっと明らかになったが、今回は幸いというか既に明らかになっている。それはやはりネットのせいだ。東京からの情報とネットの情報の隔絶は現地に反感を呼んでいる。

B 免許制度、寡占状態の護送船団方式による「負の共通認識」は、昔も今も変わらない構図で、ある程度はネットが補足するというのは実は危険な状況だ。戦争中、東京の3月10日から終戦までは現在の2チャンネルのようなマイナー情報が蔓延した。石川島造船所の近くの銭湯には勤労動員の旧制高校生が昼間やってきて「この戦争は負けだよ」と言う。石川島は軍艦の修理点検をするのだが軍艦はまるで入ってこない。つまり連合艦隊は消滅しているのだ、と。少国民はみんな軍国少年だったと言われるが、3月10日以降の東京の少年は戦争は負けると思って過ごしていた。

C 被災地ではいろんなタレントが頑張ろうとやっているが反原発タレントはいない。戦争中の慰問団のようなものだ。

D 大メディアは独占・寡占企業ではあるがネットとの共存はいまや常識だ。マスコミは変わらなければ、と言われながら今日現在何も変わっていない。

A 二重構造はそれでいい、そんなものだと思う。ソーシャルメデイアと言われているが、インターネットというインフラとそこに情報提供する仕組みがあって、場所が形成されてソーシャルメディアだ。マスメディアは自分たちが情報を集め、編集するが（その編集がダメだというのが今の議論だが）、それとインターネットが形成する情報空間の乖離とをどう関係づけるかはやろうと思えばいくらでもできる。

B その通りだが、よく言われる入れ子構造は生かされてなくてマスメディアは相変わらず旧体質だ。ネットの方は風評の形でひろがる。これはいい形ではない。

C マスメデイアは非常に閉鎖的だ。その方が楽だし、内部から変わろうという気はないだろう。

D それは戦後の平和とボケという枠組みにすっぽり落ち込んでいるに過ぎない。

A ネットの情報量はマスコミに大量に入っている。もちろん届かなかったものもある。逆にネットの情報しか見ていない人もいる。震災、原発情報については多かっただろう。マスコミでやらない災害に関する個人情報がツイッターで流れ、さらにそれが組織化されていた。そんなものがあるのだと頭に入れておく必要はあるが、マスコミ本来の大量伝達能力を忘れてはなるまい。二重構造でも両方あっていいだろう。

B それでもマスコミが大本営であることは許せない。一例ではあるがNHKの取材班はその中で変わる動きをしていると感じる。

C 戦後の民放はNHKだけではできない役割が期待されて生まれたのだが、そうはなっていないわけだ。むしろ大本営に近かったNHKがそこを埋めようとしている。民放の方が大本営的だ。

D それはお上に頼ろうとする日本人体質と呼応している。大マスコミを大本営たらしめているのは日本人の体質でもある。ネットや原発事故がそれを崩すきっかけにならないものか。

A 55年体制も壊れようとしている。メディアは変わるチャンスだ。

B 地震や津波は日本が背負わなければならない運命的なものだ。しかし原発と放射能は別だ。そこをごっちゃにしてはならない。個人的な情緒的な美談情報がおおくなっているのは危険な兆候だ。

C 教条的な反原発論もまかり通っているが、これから原発をどうするかの論議の方向はいいところにきている。オープンに議論する時期だ。

D 今後の戦略は示されていない。原発をなくして代替エネルギーはどうするのか。

A 夏の需要のピークは乗り切れた。9電力の体制の徹底的な点検と節電で脱原発の着地点は可能ではないか。

B 事故前の全電力に占める原発のシェアは3割を越えていた。再生可能エネルギーは0・9%に過ぎない。これはドイツなどのように国の政策として積極的取り組めば、解決すべき問題は多いにしても、突破口は可能だが。

C 多くの番組はお国のために頑張ろう、〝絆〟だ。絆ということばは使われ過ぎて手垢のついた汚い言葉になりつつある。

A 「ファシズムは発言を禁じるのではなく、発言を強要する」という言葉がある。「絆」も言わないと時代に遅れそうだ。災害関連の番組は多いが、この中にも「絆」が多い。

B 災害関連番組はNHKには系統があり、民放はケースバイケースだ。

C 民放が量的に少ないのはしょうがないが、思いつき単発の感じの番組がほとんどだ。

D 深夜の**「報道の魂」**でJNN系列の担当者が個人戦の感じでぼそぼそと口出ししている。それはネットの面白さとこわさに共通する。NHKのシステマティックな動きは大新聞をはるかに超えているが、そこまで肥大化したNHK報道はどこまで信用していいか。まだ疑わしいと思うが。

A NHKのなかでも「やばくないか」「危ない」の声はあるようだ。

B　これと定時ニュースは全く別だ。

C　ＥＴＶ特集に集中していて、定時ニュースへの影響はあっても小さい。ＥＴＶがすべてではないから。

D　今回民放はローカル局だと痛感した。ローカル局は仕事を懸命にやり、ネットワークがどこまでそれを拾い上げるかだ。

A　いまローカル局への広告出稿はどんどん落ちている。報道やドキュメンタリーをどこまで経営は支えられるか辛いところだ。

B　日本人は原発についていつどこで間違えたのだろうか。原発反対と組合が言った時期があった。その時自分はどんな態度だったか思い出せない。それは結局犯人探しになる。今犯人捜しをするのは生産的ではない、との意見もあるのだが、今そこに立ち戻って議論しないとまた同じことになる。

C　そりゃ1億玉砕が1億総懺悔になる国民だから。

戦争と放送

D　犯人探しは難しい。原発をちょっと横に置くと司馬遼太郎が出てこなくてはいけない。この時期再放送で**「坂の上の雲」**はまたしぶとくやっている。

A　ＮＨＫの「日本人はなぜ戦争…」は民衆の戦争史を描こうとしている。メディアがあおって南京陥落の提灯行列をやり、近衛から東條に代わる。戦争をあおるほど新聞は売れる。当時の新聞は朝日号、報知号、読売号など民衆に軍用機の献金を呼びかけて作った。要するに今の民放の視聴率と同じで紙数が増えればもうかったのだ。それに民衆は乗せられたのだという形でＮＨＫは番組を作っている。しかしもっと強力なのは教育だ。明治以降の教育をＮＨＫに作ってほしい。天皇制を含め実に徹底的なのだ。奉安殿が火事で10数焼けて責任者の校長が6人か7人自殺している。

B　校舎は木造なのに奉安殿はコンクリート造りだった。

C　「坂の上…」は秋山兄弟の物語を続ければこれから単調になる。「人間の条件」のような異質な分子は入ってこれない。小村寿太郎が講和条約から帰ってきて、日比谷事件でやられたが、司馬遼には日比谷事件は出てこない。

D　司馬遼にとって国家は「聖」なのだ。「聖」のよき部分が天皇のよき部分で、ヨーロッパのよき王家のように、という美学だ。それがダメになったと司馬は言う。

A　統帥権を「異胎の時代」として天皇を利用した勢力を糾弾してはいた。

B　震災について民放で一番やったのはフジで「ＳＭＡＰ、ＳＭＡＰ」の生放送で**「いまぼくたちに何ができるだろう」**、坂本九の歌を中心にした歌謡番組など、この時点ではすぐれた元気づけの番組だった。

C　いやすごく情緒的だった。災害の核心から目をそらすものになる。

D　いま乗り易いものに乗って行く感じで、なでしこジャパンの表彰も同じだ。

A　なでしこが勝ったのは嬉しかったが、あの政治利用はいやだ。

B　**「ＡｔｏＺ～原発番組が消えた」**は面白かった。原発の根底が暴かれている。最後のころの特攻隊は昨日まで予科練にいたような飛行士が練習機で飛ぶので途中で敵に撃ち落されてしまう。あれと同じだ。

C　原発ジプシーの特攻隊と呼ばれる。

D　下請けの下請けの暴力団が一人連れて行くと１５０万円入る。では現場の危険な労働のためにいったいいくら金をかけているのか。

C　本人も７００万円貰えるとか。１００万円の負債を背負ってる男が負債を逃れて生活できる。

D　東京電力は裏では「金に糸目はつけない。とにかくやってくれ」と無尽蔵に使っている。送り込まれた連中は1日4～5万円になった。

A　送り込まれると中で仮眠する。2時間働いて仮眠してまた働き、一人で長時間働いている。

B　被曝線量を記録するネームプレートみたいなメータを付け替えたりいろんな誤魔化しをする。警報音が鳴るのを止めるのは「鳴き殺し」だ。

C　かつて炭鉱でカナリヤの籠を持って坑内に入りカナリヤが死んだら逃げたのと同じだ。

D　オウムで上九一色村に警官が入ったとき、何があるかわからないからとカナリヤの籠を下げていた。

A　アラームメーターを付けたら仕事にならない、鳴き殺しにしなけりゃ仕事にならない、のだ。

B　この「ＡｔｏＺ」はなかなか触れられなかった問題点を明らかにしている。

C　東電の解雇あるいは闘争中の労働者はあちこちの反原発集会で労働の実態を喋っている。しかしそれは公の場で議論されていない。

A　地震の直後消防隊員みたいな二人の男が記者会見で涙し、英雄扱いだった。

　あれとこの労働実態の双方をみると大企業はこんなことをやっているのかと驚く。かつて鎌田慧がトヨタの工場へ日雇いで入って、下部労働が支えている実態をルポしたルポとダブる。

B　東海村の事故は下請けの男だった。「ＡｔｏＺ」が初めて下請けに焦点をあてた意味は大きい。これから技術者をどうするかの問題に東電は迫られている。廃炉が終わるまで10年以上かかる。そのための要員をどうするか。いまや東大、京大に原子力学科はない。技術者の補充法がない。

C　これからの原子力は墓場の仕事だ。そのために原子力学科で学ぶ人間はいない。

D　原子力学科がなくなったきっかけは「むつ」だ。原子力船が放射能漏れを起こし、将来の見通しが暗くなって学生の人気がなくなった。

A　原子力村の閉鎖性もある。差別されると何歳になっても准教授のままだ。フランスでも同様だが、日本はより閉鎖的だ。

B　「アメリカ発原発…」ではアメリカ人はよく喋った。日本人は喋らない。東電の原子力の帝王と呼ばれた社長の話には失望した。

C　マクナマラの「ベトナム戦争は間違いだった」のような発言は日本にはない。

D　戦争ジャーナリズムはアメリカ公文書館がないとできない。

A　その意味ではわれわれはアメリカの傘の下にいる。（笑）

B　サラリーマンが定年退職すると銀行はまず退職金で東京電力の株を買えと薦めた。間違っても東電はつぶれないと信じ

られていた。

C　戦後、電力の鬼松永安左衛門のもとで電力会社は9電力になった。道州制だ。**C**　道州制というよりかつての鎮台だ。陸軍の編成単位。電波管理局もこれを踏襲している。

D　ＥＴＶの**「トリオ・ホーム、3世代家族」**が面白い。一つは金田一京介一家、もう一つは夢野久作一家。この夢野一家が面白い。大東亜共栄圏の裏側をやっている一家だ。明治の曽祖父は玄洋社の頭山満と組んで孫文とつきあう。

A　頭山の中には民権論がある。中江兆民と頭山には接点がある。

D　それをつぐのが夢野久作の父茂丸で果樹園を作る。春はモモ、秋はカキ、ブドウなどがなる広大なものだ。そして地方新聞の社主でもある。その新聞に小説を書いて久作は有名になる。一家はＲ・Ｂ・ボースなどインドとつながりがあるが、久作の息子はヒマラヤの麓には地下水があるはずだと植樹し、荒れ地が沃地になる。つまり3代かけて大東亜共栄圏をやっている。これは司馬遼太郎よりはるかに面白い。

A　「霊園からみた日本近代」という本がある。青山墓地に朝鮮人の金玉均の墓があり、それを発端に墓地をめぐると頭山満の黒竜会玄洋社の流れが出てくる。Ｒ・Ｂ・ボースが相馬愛蔵夫妻の娘俊子と結婚、中村屋でカレーライスを作るなど実に面白い。

ドラマ

B　ドラマの話をしよう。今年は不作だ。中国戦線で軍に拾われた子どもが最後まで同行する**「青い目の少年兵」**（8月13日・ＮＨＫ・ＢＳ）。「おれたちはどこで、何のために戦っているのか」が判らないままビルマ付近まで行く。題材は面白い。

C　大岡昇平の「野火」「レイテ戦記」に近い。援蒋ルートを潰すための部隊が途中命令系統が判らなくなり、優柔不断の隊長のもとで軍人の組織が遊兵化し、共同体組織に変わった。戦争が日常化した時に下級兵の素朴な仲間意識が生まれ、幸い苛烈な戦闘はなく、たまに戦闘があるとこちらは当然驚くが敵も驚く、という妙な、とぼけていて、不思議なドラマだ。

D　極限状況の中でごく庶民的な兵長と迷い込んできた中国少年の交流、国民党軍との遭遇で双方じりじり下がるシーンなど面白い。

A　脱力ドラマだ。統制を失うと軍隊はああなる。命令はない。目的もなくタテマエもない。

B　しかし説明がたりない。彼らは何を食っていたのかリアルな部分がない。

C　今年はドラマは低調で昨年の「15歳の志願兵」を越えるものはない。

D　沖縄の**土曜プレミアム「最後の絆」**（8月13日・ＮＨＫ）。あれはご都合主義だ。橋田壽賀子のアメリカもののほうが出来がいい。歌舞伎の兄弟ものかな。

A　呉での日常生活を描いた広島テレビの**「この世界の片隅で」**（8月6日・日テレ）はとりとめない。焦点が定まっていない。セットもお粗末。広島駅のベンチなんか最低だ。原爆の6千度の高温で焼けて材木が残っているはずがない。

D　**「犬の消えた日」**（8月12日・ＮＨＫ）。あの頃東京には野犬がやたらにいて、野犬狩りが必要だった。

A　毛皮にしたとかの情報価値は認めるが、事実の重みはどうだろう。

B　このドラマの制作意図は「日本に暮らしながら日本を知らない。明日を考えるためには、日本を知りたい。日本を考える一つの試み。太平洋戦争の『犬の供出・献納』をもとに、子どもの感じる『戦争』をテレビドラマにします」というもの。

　わかり易さ、しかも子どもにわかるようにという配慮が大きすぎ、肝心のドラマが失速している。途中入る戦時中の実写フィルム、そして、赤地に白抜きで入るスーパー。「日本は敗北を認めず、国民に知らせませんでした」云々。それにとらわれたかのような紋切型のセリフのやり取り。青少年向けドラマは「相手が子どもだといって、決して目線を下げるな」が鉄則である。

C　「世界の片隅で」には記録映像のフィルムが入っている。だから余計にスタジオの映像と乖離する。空気が違う。それは体験のあるなしとは違う問題だと思う。

　戦争中の存在として8頭身美人の北側、イケメン水兵の速水が水際に立つシルエットはこの世のものとは思えない。綺麗な挿絵を見ているようだ、と思ったら原作のマンガがほとんどこんなものだった。

D　呉の近くには慰安所があったはずだ。それをきちんと描けばよかった。姑を気にする嫁の役が生きていないし、慰安婦の立場もあいまいだ。

A　再放送だが**「少女たちの日記帳」**。広島で、昭和20年4月6日～8月6日、先生が日記を生徒に書かせてそれが残っているというセミドキュメント。

B　あれはよくできていて、インタビューがよかった。

C　ネタ元は堀川恵子さんが広島テレビにいたときやった「広島第1高女」の話だ。

D　**「人間の条件」**（原作・五味川純平）をＢＳプレミアムで5夜連続の放送をしたが、この時代に小林正樹の戦争観を出した意義はある。この夏のドラマはこれしかない。

A　昭和37年ＴＢＳが大映制作のドラマとして放送したことがある。五味川は文壇的には無名だったがこれが三一書房から出て爆発的なベストセラーになった。

　主人公の梶は、中国人に対する非人間的な苛斂誅求をやるな、と頑張り、軍隊に入ると優秀な軍人で敵を多く殺して悩むといった宮本武蔵のような物語だ。

B　いまやテレビドラマはケータイの合間にちらちら見る程度で、難しいものは受け付けられない。ドラマの批評は評価軸を変えなくてはいけないかもしれない。

ドキュメンタリー

C　**Ｎスペ「調査報告　円の戦争　国策銀行封印された記録」**はよくできていた。中国への侵略が軍事的な面ばかり言われてきたが、経済的な侵略、軍票以外にあれだけ大量の紙幣を発行したこと、そしてそのからくりをうまく説明したことで非常によくできていた。

D　目から鱗の番組だった。日中戦争8年間の戦費は現在の貨幣価値に換算すると数百兆円にのぼる。その戦費は何によって賄われたか。国民の血税と侵略した国からの収奪だと単純に思っていた。しかし、そんな現地調達などという曖昧、単純なもの

ではなく、軍や日本の金融界が結託した巧妙で悪辣な策略が存在し、それが日本、アジアの経済に大きな混乱を与えたばかりでなく、戦争の大きな要因になった。

朝鮮銀行と日銀との間の「預けあい」という仕組みで無限に紙幣が発行できた。それが関東軍の資金になった。

その壮大なからくりを徹底した証言と調査で明らかにした。

A 中国からは金塊を持ってきて、ロサンジェルスの銀行に保管し、戦争直前に軍事、外交とは別にドル対策に動いていた。

「日本人はなぜ戦争…」はそれも含めて描いている。戦時中日本国民が買った国債は戦後紙切れになった。

B 紙幣はまさにフィクションだなあ。

C ちなみに松本清張の「西郷札」とは西南戦争のおり、軍費調達で西郷隆盛が作らせた承恵社札をいう。西郷軍敗北で二束三文になった（堀川とんこうがドラマ化した）が大陸侵略の軍費調達だって似たようなお粗末な結果になった。

D 太平洋戦争開戦70年はNHKが「日本人はなぜ戦争…」に結びつけた総力をあげた大企画だったが、作り手が東日本大震災に総力を投入されて、終戦番組を結集する時期に作り手がすぽっと抜けてしまった。NHKでは地方から人力は全部吸い上げて災害と中央のバックアップにした。全国的に集約された一大キャンペーンにまとまらなかったのが惜しまれる。

A NHK広島は**「生かされなかった諜報記録」**。特殊な小規模の飛行隊の情報を掴んでいたが上に上がらなかった。だから警戒警報が出なかったというのは事実だが、原爆が投下される予想はなかったのでは？

B 原爆に成功した情報は知っていた。

A それだけの情報で空襲警報が出ていたら助かった人がもう少しあったかもしれない、と生き残った人の証言がある。それはある程度言えるかもしれないが、戦争末期の、情報戦でかなり力をなくしている時期だから、情報がどれだけ認められたか疑問だ。圧倒的な原爆の威力の前に情報がどれだけ意味があったか、首をかしげる。

B 長崎の**「二度と原爆を使ってはいけない」**も作りが悪い。デルノア司令官が原爆少女の手記を出版しようとしたり、第1回の原爆式典を支援したりはいかにもアメリカ人らしいと思うが、1枚の絵を託したその絵がどうもうまくない。大浦天主堂を描いているようだと思うけどよくわからない。ひきつける力がない。見聞きしたことをアメリカで話したというが画面をみて納得できるものではなかった。

C **「昔　父は日本人を殺した〜ピューリッツアー賞作家が見た沖縄戦」**は悪くはないがという作品。この時期渡辺謙のアメリカものが毎年放送されるが今年の**「9・11テロに立ち向かった日本人」**は面白かった。ノーマン・ミネタという運輸長官。元日本人なのに体質が全く日本人的でなく、9・11のとき、「アラブの人たちを守るのがアメリカ憲法だ。戦争中私は日本人として抑留され差別された記憶があるからそれがわかる」と実に立派なことを言う。アメリカへ行くとこんな体質になり、なんとなく流されていた日本人体質とはまるで違うと痛感した。

D 日本の多くの俳優、タレントは紀行ものには出るがこんな芯のある番組にはでない。渡辺謙はエライ。

A テレ朝、14日放送**「玉音放送　66年目の真相」**。玉音放送は久米宏のニュースのころからテレ朝がやっていたものだが、今回は放送の前に6〜7種類の原稿があり、どんな人がそれに関与したかを詳細にやっていた。最後に安藤成徳が手を入れる。これまでやってきたものの総集編の感じだ。日本首脳は結局天皇に頼るしかない、連合国は天皇が声を出さないと本当に天皇が決断したと信じない、この二つで行われ、必ずしも国民へ向けられたものではない、国際的な認知のためのものだったと今回の番組で明らかにした。

B 天皇があそこまで考えてやったのかなあ、と思った。

C 軍隊を抑える最後の神託カードだった。国際的な認知云々より「神様が喋る」意味が大きかった。

D 外国にいる日本軍隊に一斉に終戦を伝える意味も大きかった。

A 天皇に喋るように言ったのは鈴木貫太郎か侍従長の木戸かどちらかだ。

B 天皇のこのカードがあるから阿南は安心して終戦に反対した。最後の御前会議にはそんな思惑があり最後に見事に天皇に下駄を預けてしまったわけだ。

C しかし、企画のヘソと資料はなんでもアメリカ国立公文書館なんだね。あれだけが唯一の権威のようになっている。

D 10日の深夜の**「市民たちの戦争　東南海地震〜封印された大震災」**。中島飛行機の戦時体制では飛行機を格納するため大きな建物が必要で、地震でみんな潰れて人が下敷きになった。

A 東南海地震は3年ほど前名古屋の局が中途半端な形でやったことがある。自分で体験した地震だが全く新聞に出なかった。

B 地震は12月7日、翌日が開戦記念日で8日の新聞の1面は天皇の大きな写真の下に1段の小さな記事があり「損害は軽微」とある。まことに見事な報道統制だ。

C 資料は終戦時に全部燃やして何にも残っていない。かろうじて名古屋の気象台の記録が残っている。あとは伝聞しかない。

D 公的資料にたよらず、地を這うように取材したテムジンの〝中国もの〟を買いたい。例えば**「引き裂かれた歳月〜シベリヤ抑留」**（再放送）**「留用された日本人」**（再放送）。ソ連は戦争で1000万人が死んで労働力不足が深刻だった。日本人の捕虜を労働力として使おうと、「異国の丘」になるのだが、そこで5万人以上が死んだ。

「留用…」は中国だ。国民党軍と八路軍が内戦になり、残っていた日本人が八路軍に組み入れられ、鉄道関係、医療関係、炭鉱関係など専門技能を持っていたものは「とどまれ」と新中国建設に8年間協力させられた。初期にはシベリヤと同じような過酷な状況があったが次第に中国人の中で信頼され重用されるようになる。鉄道敷設はソ連の技術者が無能で、日本人は辺境まで家族ぐるみで仕事を続ける。

C それは満鉄、満映の歴史にもある。満映は半数が残った。満映の機材はソ連軍と八路軍が取り合って、八路軍がおさえた。

A それらの大半の日本人は日本の赤十

字と中国の紅十字が話し合って帰国するのだが、そのあと文化大革命だ。日本人と協力した中国人がやられた。

中国語の達者な女性の鉄道員はのちに赤十字の総裁の通訳として中国へ随行し、周恩来に「何故中国語がうまいの？」と聞かれ、鉄道敷設の体験を話し、大変感謝された。長い物語が続いている。

留用の当初、中国は建国途上、国共戦争のさなかで地域によっていろんな体験があるようだが、ソビエト抑留政策との違いが面白い。

C　「**周恩来**」もテムジンの制作。4回放送。側近や遺族が語っているので周恩来への徹底的な批判はないが、歴史の裏面にある周恩来をあれだけ描いたものはない。欲を言えば反対側から描いたものも欲しいとの意見はあるが、とりあえずまとめた稗史で残すことが重要だ。

D　「周恩来秘録」（文春文庫・上下2巻）には周恩来がいかに毛沢東におびえていたかが描かれている。テレビにもそれは出ていて、周恩来の顔がだんだんけわしくなる映像シーンは興味深い。

A　中国は文化大革命の評価がまだ定まっていない。実はできないのだ。

B　中国の放送局は上は共産党で2重構造だ。日韓中フォーラムの出席者と話してもそのことについては絶対に彼らは触れない。しかしその統制は崩れつつあるのではないか。

C　黒竜江省の地下ネット情報は凄いことになっているそうだ。テレビ局はまだ権力統制が効くのだろう。

D　中国は地方局もみんな国営だ。党の幹部が必ず入っている。

アナログからデジタルへ

A　7月4日の正午、バラエティー番組で万歳していた。

B　日曜の昼で、フジテレビがまず万歳をやり、次いでTBSの「和田アキ子」で万歳をやった。どの局も少なくとも民放はその前に社長が出てきて「長らくアナログテレビを見ていただいてありがとうございました」と挨拶すべきだろう。そもそもわれわれはなぜテレビの受像機を買わなければならないのか。公園の広告のあるベンチは広告主の費用で作られ、われわれはそこに座るけどベンチを買ったわけではない。テレビの受像機は広告が出る。ベンチと同じではないか。タダで配れ。日本人はお人よし過ぎる…ちょっと暴論か？

C　「それで終わりですか」という感じだが、大震災、原発の状況下では仕方ないだろう。行政的には大成功だ。いかに突然終わったと驚く人がいても大成功だ。総務省は大声で万歳！と言いたいところだろう。

C　日本だからできたんだ。多分一番お金を使ったのは日本だ。

D　アメリカはケーブルとネットが発達しているし、一方で「電波の届かないところに住む方が悪い」と突き放している。

A　地方民放は地デジ化のために経営がおかしくなるほどお金がかかった。

C　民放経営者にしてみれば「原発事故は地震と津波のせいで、自分の責任ではない」と思いたがる誰かと同じで、悪いのは総務省で民放は被害者だと思っていたのではないか。

D　アナログ、ハイビジョン、そして地デジに至る経過の中で民放経営者は終始一貫して被害者意識だ。こんなにうまくいってるのになんでアナログを止めるのか？と言う。しかし、変えなきゃダメなのだ。10年前にはネットの時代が来るとわかっていた。地上波だけアナログでというのはあり得ない。確かに地方民放の経営は苦しく、番組制作にお金が出なくなったのだが、だからといって、やらなきゃダメだったろう。

C　じゃ、地デジになってテレビはいったい何をやるの？メリットは何かと問いたい。民放BSはいまやテレショップと韓国ドラマか海外の旅番組か再放送ドラマばかりでどこも特長がない。あれをやりたくて地デジにしたわけじゃないだろう。民放は何を考えているのか？

A　何のためのデジタル化かについて、総務省は電波の効率的利用の順位をかなり下げ、「いいサービスができます」ということを専ら言った。しかしデジタル化以前にハイビジョンがあり、日本人は高品質テレビをよく知っていた。最初は液晶テレビの値段が高かったこともあって、みんなながなか高品質に手が出ず、普及は遅々として進まなかった。

ある時期から政府が販売促進のためのエコポイントや、コンバーターを配ったりして急速に普及がひろがった。

しかし動機は電波の効率的利用だと思わざるを得ない。

B　それを言わないと他の業界、財務当局への理屈がたたない。いろいろまわりを見ながらだが、これは官主導の最後の大政策だろう。

C　問題はこれからだ。どう考えてもテレビ離れは進む。デジタルになったからもうテレビは要らないという世帯が現実に何万もある。「一番欲しい情報端末は？」と聞くと20代以下は圧倒的にケータイだ。次いでゲーム機、パソコン、その次くらいがテレビだ。

じゃテレビは何をするか。みんなが意見を言える場所としてはインターネットがあるが、今何が起こっているのか何が問題か、論点を整理して提示し続けること、それがテレビ、ラジオであろう。

A　昔は町内、長屋など界隈の情報交換があった。いぎたない噂話が多いのだが、それの役割を受け継いできたのがテレビだと思っていた。いまはそれをさまざまなソーシャルメディアが担おうとしているようにも思うが、落書き的なツーチャンネルはいまや人気がない。それより、家庭のなかのこの画面の意味を考えたらどうか。かつてのテレビは14インチが主流だった、いまや40インチが主流で、実に大きい。この大きい画面と向き合う人とどんな関係を持てばいいのか、持てるのかをテレビは考えるべきだ。

B　いまみんなはすぐ反応してくれるもの、インタラクティブなものに慣れてしまった。ゲームのせいだが、テレビは一方的に編成して押し付けてくる、と言われる。大勢でテレビをみる形は、テレビ草創期の力道山の街頭テレビから、現在のスポーツビッグイベントのみんなで大画面をみるスポーツバーまである。それが家庭に戻ってくるだろうか。そんないろんなことをか

んがえなければいけない。しかし、ブロードバンドの伸びはアメリカに比べて非常に遅い。新しい動きはなかなかでないかもしれない。

C　アクトビラ、などテレビでインターネットができるようになったのは数年前だ。それが全然広がらない。アメリカのコンスーマ・エレクトリック・ショーでブロードバンドのものが出たが熱心だったのはサムソンなど韓国の電子機器メーカーだ。日本は置き去りにされるかもしれない。地デジになって日本はいったい何に取り組めばいいのだろう。

ラジオ

C　**「空の防人**（さきもり）」は戦時中目の不自由な人が「聴音兵」として爆音を聞いて「これはB29、これはグラマン」などと敵機を識別する仕事をした物語。

D　山形放送の**「それぞれの異国の丘」**が面白かった。「異国の丘」は吉田正が帰国する前に日本国内で流行していて、ラジオの「のど自慢」でよく歌われた。吉田正のシベリヤでの曲は3～4曲あるが、彼はそのことをあまり明らかにしようとしなかった。

A　シベリヤにはノルマ、アクティブ、吉村隊長の暁に祈るなどいろんなことがあって、数々のヒット歌謡曲を作っていた吉田正にとって触れたくないところだっただろう。

B　シベリヤ抑留にはいろいろ複雑な事情がありこの録音構成は素材として非常に面白いのだが若い審査員には理解されず、民放祭コンクールでは落選した。

C　民放コンクールといえば、北海道放送のラジオ録音構成**「インターが聴こえない」**も北海道警の白鳥刑事をめぐる射殺事件を扱った作品だが、事件に連座した80歳台の元北大生が当時を回想、インターナショナルの歌の下で、青春をたぎらせた時代とは何であったのか、HBC歴代の記者が取材したテープを生かした力作だった。

D　ラジオで思い浮かぶのはその程度だ。録音構成の面白さを今のラジオは生かし切れない。スキルの断絶はいたましい程だ。

結び

A　「戦後」と「災後」が二重写しとなり、「被爆」が「被曝」を捉え、「アナログ」が「デジタル」に籍を譲った2011年夏は、編年史的なメルクマール（刻印）として記憶さるべきだろう。

D　かつて岸田功は「安土桃山時代」が織豊政権の間に存在したように、高度成長期から安定成長、そしてバブルへ、その道筋に「放送文化時代」があったのではないかと仮説を立てたが、旧テレビ文化とニュー・メディアキャストを架橋する立ち位置は迷走している。メディア漂流の時代だ。

B　それでも「過去」が活字に支配された時代から、映像アーカイブスによる「過去」を獲得している時代にわれわれは遭遇している。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

座談会の日時　8月19日（金）午後3時～6時半

参加者・伊藤雅浩、隈部紀生、鈴木典之、藤久ミネ、堀川とんこう、前川英樹、松尾羊一、（書面参加）渡辺紘史

▼この他の多くの貴重な発言を割愛したことをお詫びします。（編集部）

ラジオのページ

民放ラジオ　還暦

武本　宏一

往年のラジオ番組の冒頭には、それだけで聴く者の心をぐっと掴んでしまう〝声のキャッチフレーズ〟が、必ずと言っていいほど置かれていたものだ。「今日から明日への曲がり角、ミッドナイト・ストリート」…というのは、昭和30年代に、当時のラジオ東京の深夜に毎晩流れていた女声ナレーション。

そのセクシーなナレーションの虜（とりこ）となり、思わずラジオ東京を受験して幸い社員となった小生、その声の主、麻生雅子アナの前に初めて立った時には、思わず身震いしてしまったっけ。

さて…

「今日の話はきのうの続き、今日の続きはまたあした」というのは同じ頃ラジオ関東の夜10時台に毎日流れたトーク番組「昨日のつづき」のキャッチフレーズである。前田武彦をはじめ、永六輔、その後大橋巨泉なども加わり、世の中のあらゆる事柄をテーマにめいめい好き勝手にしゃべる番組だった。その番組に企画当初から参加し、レギュラーコメンテーターとして、ユーモアにくるんだ毒舌をくりひろげていたマエタケこと前田武彦さんが亡くなった。

先日マイカーのラジオをふとつけたら、これもTBSラジオの長寿番組の一つ「誰かとどこかで」で、永六輔さんが、相棒の遠藤泰子さんにこんな話をしていた。

「あなたね、今の時代24時間どこのラジオをつけてもね、みんな台本無しでフリーにしゃべってるでしょ。現にぼくらも台本無しだよね。ところが昔は、ラジオ番組には必ず台本があったの。それが、ラジオ関東の〝昨日のつづき〟ではね、前田武彦が言い出して、台本なんか無しにして自由にしゃべることにしたの。これ、実は凄いことなんだよね」

確かに。

ラジオ番組がしゃべる人の自己責任になったこの時から、本当の意味で〝ラジオは人間だ〟と言えるようになったのだ。

そのマエタケさんや永さんが育ててくれた民放ラジオが、この9月1日に、スタート60周年の節目を迎えた。

私の耳には、まだ子供の頃、我家の古いラジオのスピーカーから流れる古川ロッパ他出演の「ラジオ東京開局前夜祭放送」が、何ともハチャメチャな音の固まりとして、今も鳴り続けている。

民放ラジオ、還暦か。なんて感慨にふけるのは、まだまだ早いぞ。

大正14年に放送を開始した大先輩のNHKラジオは、再来年には放送88年の〝米寿〟を迎える。

民放ラジオは今こそ古き革袋に新しい血を注いで、音メディアとしての可能性を追求し、挑戦してもらいたい。

第11回日韓中テレビ制作者フォーラム
札幌大会日程 ―テーマ「地域と暮らし」―

時期 9月22日（木）～25日（日）
会場 札幌・北海道大学 学術交流会館

第1日目（22日）

14・00 ホテル・チェックイン
札幌アスペンホテル
16・00 開会式
16・30 大会日程説明
16・45～〈地域と暮らし〉
上映 中国ドラマ「野鴨子」 ＣＣＴＶ
上映 韓国ドキュメンタリー「私の故郷」ＥＢＳ
19・00 歓迎夕食会会場へ移動
19・15 歓迎夕食会

第2日目（23日）

08・30 ホテルから会場へ移動
09・00～〈地域と暮らし〉
上映 日本ドキュメンタリー「嵐の気仙沼」ＮＨＫ仙台
上映 中国ドキュメンタリー「家園」四川電視台
12・00 昼食
13・15 **緊急フォーラム**
「テレビは震災をどう伝えたか」

３・11の東日本大震災の映像は瞬く間に世界中を駆け巡り、世界の各地に衝撃をもたらした。ヨーロッパでは、その国のエネルギーの基本政策さえ大転換させた。

その報道のあり方の仔細を見ると、日本の災害の現状をあまりに過剰に曲解させるものが多い。隣国、韓国や中国の報道も然りだ。

日本のテレビ報道、番組はこの半年、必死で被災地の様子を伝えてきた。だが振り返ってみると、放射性物質による土壌汚染の広がり、肉牛をはじめとする食料汚染の拡大、破壊された原発４基の現状と先行きが見えない避難民の生活などを見ると、災害初期の外国の過剰反応を全面否定するわけにはいかない。

一地域の大きな災害・事故は、グローバル化した世界のメディアに多くの課題をもたらした。

体制が違うアジアの隣国、日本・韓国・中国、テレビフォーラムは札幌大会で11回目を重ねる。試行錯誤しながら、確実に放送人の議論する場に深みをもたらしてきた。

この３国の討論「テレビは東日本大震災をどう伝えたか」は、テレビの報道番組に新鮮な視点を提供するであろう。

○司会（モデレーター）
音 好宏（上智大学教授）
○パネリスト
鎌田 靖（ＮＨＫスペシャル キャスター・解説委員）
金平 茂紀（報道特集キャスター ＴＢＳ執行役員）
李 峰（四川電視台 番組Ｐ）
高 松（四川電視台 番組Ｐ）
キム・ヒョンソク（ＫＢＳ 震災番組Ｐ）
キム・デホン（ＫＢＳ 報道記者 震災番組取材）
○会場に日韓中テレビ制作者１００名、札幌市民50名、北大生（留学生を含む）50名、東北の被災者の方数名
○上映
日本「ＴＢＳ報道特集 東日本大震災特集」（15分）
韓国「ＫＢＳスペシャル 震災１００日 ゆれる日本」（55分）
中国四川ＴＶ「新家」（48分）

18・45 緊急フォーラム終了 夕食会場へ移動
19・00 夕食 札幌アスペンホテル

第3日目（24日）

午前中市民参加鑑賞
08・30 ホテルから会場へ移動
09・00～〈地域と暮らし〉
上映 韓国ドラマ「向かい合って笑って」ＭＢＣ
日本ドラマ「フリーター家を買う」ＣＸ
中国ドキュメンタリー「暑立里」深圳文聯
13・00 昼食
14・00 ドキュメンタリー分科会
ドラマ分科会
16・15 小樽ナイトツアー観光エクスカーション
（夕食 小樽ベイエリア）
18・30 集合写真撮影後夕食会
20・15 夕食会終了後ホテルへ
21・15 ホテル帰着

第4日目（25日）

08・30 ホテルから会場へ移動
09・00 上映・北海道内放送局作品
ドラマ「ミエルヒ」ＨＴＶ
ドキュメンタリー「命の値段」ＳＴＶ
11・15 第11回日韓中制作者フォーラム札幌大会合評総括
12・00 昼食
13・30 北海道大学東アジアメディア研究センター主催によるＴＶフォーラム連携シンポジウム
「東アジアとメディアの新たな可能性」
16・00 第11回札幌大会終了

第4回ドキュメンタリー・ワールド

映像の中の「東北」

共催　放送人の会
　　東京大学大学院情報学環
日時　2011年7月16日（土）
　　午後1時30分～5時
会場　東京・本郷　東大福武ホール
司会　石田英敬（情報学環長・教授）
講師　桜井　均（情報学環客員教授・元NHKプロデューサー）
出演　今野　勉（放送人の会代表幹事・プロデューサー・作家）
　　藤久ミネ（放送評論家）
＊桜井・藤久両氏は「放送人の会」会員

前回（第3回）から東京大学大学院情報学環の「知の冒険」プロジェクトと提携し学問的研究にも寄与することになったこのセミナーは、今回も、「放送人の会」が力を入れているオーラル・ヒストリー記録「放送人の証言」に沿って、〝アーカイブ作品で検証する日本の戦後史〟をテーマに組み立てられた。発生以来社会的関心の的となっている「東日本大震災」（3・11）の時代的・社会的意味を検討してみるための野心的でユニークな試みになっている。

「知の冒険」を主導する石田学環長も、冒頭「3・11を国際的視野でどうとらえるかを今年の研究テーマに設け、広く専門的知見の集約に努めている。本日の映像作品による実証的分析の試みは貴重な機会だ」と挨拶し、討論にも積極的に加わった。会場は、3連休初日の酷暑の午後とあって空席は目立ったが、学環の若い研究生たちも熱心に聴講していた。

講師・桜井均氏は、例によって素材の番組選別から一本化の編集までを一人で奮闘し、映像の流れを上映しながら、わかり易く試論を展開したが、氏の論旨は「東北地方の民衆史は、戦時も戦後も東京の集権化・巨大化の過程とウラハラになっている。その多様で複雑なからみを映像記録で腑分けすると、両者にとって3・11の画期的意味も、〝災後〟の課題も自らはっきりしてくる」ということにあった。その帰結は、集まった聴衆たちの予感や期待とも一致したように見受けられた。

桜井氏が論述の〝柱〟として選んだ作品は、1967年に放送され衝撃的傑作と評された「和賀郡和賀町～1967・夏」。60～70年代にNHKドキュメンタリーの旗手の一人として活躍し、斬新な手法と鋭い指摘で今も信奉者の多い工藤敏樹氏（1992年没・享年58）の代表作の一つだ。岩手県南部の典型的な東北農村の状況を、俯瞰と接写と歯切れのいい説明とで明晰にとらえ、土俗的日常に混在する戦争体験、農政破綻、出稼ぎ、若者流出など、村落共同体の崩壊と過疎化に至る〝痩せ細り〟の歴史を浮き彫りにしている。作品は今見ても新鮮で、「東北問題」の象徴性を失っていない。

桜井氏は、これを幹に枝葉となる作品を随時挿入して、「東京」マンモス化の支え役となってきた「東北」の存在を例証していく。例えば「富谷国民学校」（69年、工藤）で学校疎開の受け皿を、「なにわ節説法と少年たち」（65年、工藤）や「新宿～都市と人間に関するリポート」（70年、工藤）で若者の流入と同化・定着を、といった具合に。時代が下がると、「メッシュマップ東京」（74年、相田洋）や「日本リゾート列島～ふるさとの風景がかわるとき」（90年、桜井均）なども続く。NHK作品だけでなく、民放作品も、例えば今年のギャラクシー賞大賞の「夢は刈られて～大潟村・モデル農村の40年」（秋田放送、石川岳他）など重厚な記録も参照する。説得力のある〝映像曼荼羅〟だ。

さて、ゲスト出演のお二人は、実作面と評論面での当会のエース。

先ず、今野勉氏は「長寿番組『遠くへ行きたい』の取材でも全国くまなく歩き、今回の被災地もほとんど訪れていて、土地柄も知っている。災後に行ってみたが壊滅し、手がかりもない。東北は貧しかったので、歴史的風景も維持されにくい。自立・自営の志をどこまで具体化できるか、埋蔵力は元々大きい」。

藤久ミネ氏は、「テレビの記録を〝時間軸〟で検討する手応えを再認識した。工藤作品の洞察力と今日性はさすがで、アーカイブ価値の一つの範を示した。今回の被災は戦争の焼け跡とは違う。瓦礫の多さは高度成長の証で、モノ信仰への反省もある。復旧でなく、どう復興するか、メディアの視点や姿勢も試される。要はそのエネルギー」。

石田教授は、「大パニックも、人は忘れ易い。〝東日本〟という概念をどうとらえ直すか、国としても大きな転換を迫られていよう」。

桜井氏は原発事故と放射能汚染の重大性にも触れ、工藤氏のもう一つの代表作「廃船」（69年、第五福竜丸の悲劇）なども挙げて論じたが、ここでは紙幅の都合で割愛する。

最後に、今野・藤久両氏から「アーカイブは保存でなく価値の発掘が大切だ。震災の記録も、放送作品だけでなく、事実のナマの記録を手広く保存する工夫が望まれる」との指摘があった。

この指摘は重要に思われる。会の長老・松尾羊一氏（評論家）の当日の感想も、その点に関して含蓄深いので、そのまま拝借してめとしたい。

「アーカイブスの分析はメディア・リテラシーの有力な武器になる。テレビも、一作品批評の時代ではない」。

（記　鈴木典之）

第27回放送人句会

◇平成23年7月13日（水）
◇於…赤坂・麦屋
◇選者…星野高士
◇出席…上村暁蛙、荻野慶人、鈴木もんど、鶴橋康夫、豊田まつり、中島丈博、新村もとを、橋本きよし、林備後、松尾馬笑、森治美、横田理恵。西川阿舟（14名）
◇不在投句…大山勝美
◇兼題…羅（うすもの）、白玉、ライター（脚本家、脚本も可）

【星野高士特選】

沖を見て羅の人動かざる　もとを
羅の胸元を灯のゆらめきて　もんど
羅や悲しさ透けてしまふかも　まつり
羅の女奈落を連れてくる　康夫
白玉をひとつ載せたる銀の匙　備後
白玉が七つは一寸多いでしょう　もんど
俵屋の氷白玉うやうやし　もとを
羅の主役に空気はりつめる　阿舟

【星野高士選】

白玉やをんなの孤独うす甘く　まつり
大物女優白汁粉脚本家　備後
うすものに女すてこ透けさうに　勝美
ホン屋某ペン放り投げかき氷　慶人
夏座敷脚本家只今考慮中　康夫
明日こそは暑さいいわけ脚本家　勝美
羅の佳人いずこへ明石町　暁蛙
羅はふたり作家と大女優　阿舟
四万十の川風と冷し白玉　もとを
ホンは今胸突き八丁どぜう鍋　もんど
羅や指大らかに受ける盃　きよし
愛されて白玉を食み午後となる　治美
白玉の歯ごたへ近き母の声　きよし
羅に縹の火照り浮きて過ぎ　康夫
シナハンの作家と二人氷水　阿舟
明治座に近松が来る極暑かな　暁蛙
大団円書きつつ汗の脚本家　もとを
羅の家紋も泣きぬ通夜の席　治美
白玉や亡き母の齢考えず　慶人
白玉やのっぺらぼうの顔いつも　丈博
羅や折皺のまゝ風のまゝ　きよし
露涼し台本怖きほどすばらしく　まつり
薄絹の老女と仰ぎ席ゆずる　馬笑
盆芝居特に脚本などはなく　備後
上気して頷く頬や薄衣　もとを
羅や少女鏡にあかんべえ　康夫
白玉の沈む器のうすみどり　きよし
羅の生地買いに出て三回忌　理恵
掛取に急ぐ女将の薄衣　備後
シナリオに無い夕立ちにゴロ寝かな　きよし

【会員互選】

羅を着せたし城の姫たちに　慶人
羅の女人の指の冷たかり　もんど
夏枯れてシナリオのなき街哀れ　慶人
藍切子の白玉に抹茶碗　暁蛙
羅を脱いで遠き花火聞く　理恵
胎内の吾白玉に埋もれてむ　丈博
ステテコのゴム緩みけり絽を纏ふ　丈博
血の凍る終幕成れり半夏生　もんど
羅の女ゴキブリ殺めしか　康夫
谷崎忌コティの香る女客　暁蛙
うすごろも着てあなた今狐つき　備後
老い肌に羅の袖樟匂う　丈博
白玉ののどすべる午後青簾　理恵
羅の家族も泣きぬ通夜の客　治美
別離の日羅のきみ艶めきて　丈博

【選者吟】

白玉を前に名もなき作家なり　高士
梅雨明けて癖字でわかる脚本家
羅や嘘と知りつつ聞く話
白玉や急に雨降る神楽坂
ライターは情を捨てねば冷し酒

次回放送人句会
9月14日（水）18時頃～
於…赤坂・麦屋（Fax03-3586-0056）
兼題…仲秋、案山子、蟷螂（かまきり）、カメラ
※この回から7句投句とします

新会員

加藤義人　演出家。作品「夏目雅子物語」「地球45年の奇跡」NHKハイビジョンドラマ「妻を看取る日」など。現テレビマンユニオン社長。

編集後記

▼川平朝清さんから左記のハガキが届きました。
冠省　OBのために会報購読を可能にして下さって本当にありがたく思った51号「放送人グランプリ2011」の選考過程の記事でした。読みごたえがありました。NHK大森淳郎さんの特別賞は「敗戦とラジオ」「沖縄学のまなざし」を見ていただけにウチナンチュとしてもうれしいことでした。そして懇親会での秋山豊寛さんの発言〝東北の「マキ」「マケ」、血族の…この物凄い血の部分が日本の秩序を形作っている〟はオキナワの今にも通じるものでした。　不一
　会員の方から初めて頂いたお褒めの葉書で編集部一同大喜びです▼この号は会報で初めて20ページを越え22ページです。多数の方からの内容の濃い原稿に感謝しております▼テレビ金沢の中崎清栄さんが民放連での用の帰りに事務局に立ち寄られ、左の画をいただきました。14世紀後半のイタリアの画家ニョーロ・ガッディの壁画の一部です。テレビ金沢は金沢大学と協力してこの画家と取り組んでいるそうです（視郎）